

平成28年度

研究活動報告



桜美林大学 老年学総合研究所

はじめに

皆様におかれましては時下益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

平成27年度は桜美林大学「老年学総合研究所」と名称変更後の最初の年でした。老年学総合研究所は、世界に類を見ない超高齢社会を迎えた我が国において、より明確に「老年学」という、高齢者を取り巻く広範な課題に適切に対処できる研究機関であることを知っていただくとともに、広く社会一般の方々に「老年学」の総合的な情報発信の中核的機関としても親しんでいただくため、桜美林大学「老年学総合研究所」と名称を変更させていただいた次第です。本年も研究所所属の研究者を中心として活動報告を取りまとめ、ここに平成27年度報告書として皆様にお届けすることができました。

老年学総合研究所は大学院老年学研究科の7名の教授を中心に、国内外からの客員研究者などから構成され、これまで以上に学際的で多様な視点からの老年学研究を総合的かつ強力に推進することはもちろんのこと、国内外の研究機関と連携し、科学的根拠に基づく情報発信を実施し、我が国の健康長寿の実現に向けた取り組みとして実践していく研究拠点でもあります。本報告書におきましても、老年学という広範な領域を包含する学際的研究にふさわしく、各研究者の様々な研究課題とそれらの実践活動を中心として実社会にお役に立つ実証研究が数多く報告されております。

本報告書の作成と出版にあたっては、老年学総合研究所の運営及び研究機関としての活動に多大なご協力をいただいた多くの先生方、また客員・連携研究者の方々、そして研究所の事務局の皆様のご努力のたまものであり、ここに厚くお礼を申し上げます。今後も桜美林大学 老年学総合研究所に対する温かいご理解とご支援、そして厳しいご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2017年3月

桜美林大学 老年学総合研究所

所 長 鈴 木 隆 雄

平成28年度 研究活動報告

究員（常勤）研究活動報告

1) 鈴木 隆雄	1
2) 長田 久雄	5
3) 白澤 政和	7
4) 杉澤 秀博	13
5) 新野 直明	17
6) 芳賀 博	19
7) 渡辺修一郎	22
8) 直井 道子	27

客員研究員研究活動報告

1) 鄭 丞媛	29
---------	-------	----

連携研究員研究活動報告

1) 青木 宏心	32
2) 池田 晋平	34
3) 植田 拓也	36
4) 植田 大雅	38
5) 上野 佳代	39
6) 江川 賢一	41
7) 遠田 恵子	42
8) 皆田 良子	44
9) 久喜美知子	45
10) 久米喜代美	47
11) 小林由美子	49
12) 新名 正弥	51
13) 東方 和子	53
14) 徳田 直子	54
15) 中辻 萬治	55
16) 早崎 広司	58
17) 平林 規好	59
18) 藤井 顕	60
19) 藤原 妙子	61
20) 堀内 裕子	62
21) 前田志名子	65
22) 松永 博子	67
23) 山岡 郁子	69
24) 吉田 綾子	70

1. 研究課題

- (1) 認知症高齢者における万引きに関する研究
- (2) 在宅医療の有効性に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 認知症高齢者における万引きに関する研究

「認知症高齢者の万引き」に関しては、残念ながら先行研究はほとんど無いのが現状である。平成28年度、鈴木が勤めた東京都（青少年犯罪対策室）「万引きに関する有識者検討会」での調査では、認知症あるいは認知機能低下高齢者に焦点をあて、国が推進する介護予防（地域支援事業）において利用されている「基本チェックリスト」25項目の中で認知症予防に用いられる3項目の質問、すなわち、①いつも同じ事を聞くなどの物忘れがある、②自分で番号を調べて電話をかける事をしない、③今日が何月何日か分からない時がある、を万引き被疑者（65歳未満と65歳以上の2群）および一般高齢者について調査し、その結果、いずれの項目においても一般高齢者に比較し万引き被疑者では該当割合が有意に高いという結果が得られた。特に65歳以上の高齢者万引き被疑者では見当識障害を窺わせる③の質問項目に関しては一般高齢者が11.2% に対し65歳以上の万引き高齢者被疑者では48.1% ときわめて高い該当率を示していることが注目された。

さらに同検討会の実施した他の調査結果の分析から、単純集計ではあるが高齢者万引き被疑者と一般高齢者の比較から以下のような特徴が挙げられる。

1) ソーシャルサポートの低さと孤立感の大きさ

- 「相談に乗ってくれる人」・・・無； 25.9% vs 2.3%
- 「気持ちの支えになってくれる人」・・・無； 29.6% vs 4.0%
- 「相談に乗ってくれる相手」・・・無； 25.9% vs 2.3%

2) 社会経済的低さ

- 「将来の生活に不安；よくある」・・・有； 38.9% vs 15.7%
- 「自分の暮らしをどう感じているか」・・・苦； 44.6% vs 17.7%
- 「日本の社会のどの層に入るか」・・・下； 46.4% vs 17.8%
- 「世帯月収15万円未満」・・・； 43.0% vs 15.2%

3) 低学歴 「大学卒割合」・・・； 9.1% vs 31.7%

本調査は横断調査であるために「万引き」と「認知症（認知機能低下）」に関連性は確認できるが、両者間の因果関係については不明である。さらに「万引き」と「ソーシャルサポートの低さ」、「社会経済的低下」および「低学歴」にも関連性が認められているが、これらの関連要因はさらに「認知症あるいは認知機能的」の関連要因でもあり、いくつかの縦断的コホート研究によって危険因子として確定している要因でもある。したがって、これらの関係性は以下のように整理することが可能と思われる。すなわち、「万引き」と「認知症（認知機能低下）」に見られる関係性はむしろ両者に共通の危険因子（交絡要因）の介在による「見かけ上の強い関連性」である可能性が大きい。認知症のタイプ、たとえばピック病などでは前頭葉の障害などによる高次脳機能障害により、万引きを含めた反社会的行動が顕在化する例も知られているが、おそらく多くの認知機能低下による高齢者の万引き行為は、学童期に始まる長い人生の帰結としての「低学歴」、「社会経済的低下層」、「自己効力感の低さと不安感の多さ」そして「社会的紐帯の低さ」などの共通する危険因子が「認知機能低下」と「万引き」という二つの現象をもたらしている可能性が存在する。したがって、「万引き」を防止するひとつの可能性は、共通する危険因子を有する「認知機能低下」を予防するための方策を進めることでもある。幸いわが国においても認知機能低下抑制のための介入効果が確認されており、今後は、認知症予防のみならず（認知機能的に伴う）高齢者の万引き行為を予防するためにも、両者に有効性のある介入手法の確立が急がれる。

	被疑者 (65歳未満)	被疑者 (65歳以上)	一般 (65歳以上)
いつも同じ事を聞く等の物忘れがある	23.9%	35.2%	11.2%
自分で番号を調べて電話をかける事をしない	43.7%	38.9%	14.5%
今日が何月何日か分からない時がある	30.6%	48.1%	16.5%

(2) 在宅医療の優位性に関する研究

わが国では超高齢社会の進展により、今後、高齢者特に後期高齢者の急増が確実である。後期高齢者の特徴として加齢に伴う生活機能の減衰と慢性疾患の増加は不可避であり、その主要な対策のひとつとして在宅医療の充実と普及が重要とされ推進が図られているところである。このような在宅医療の普及のためには、科学的根拠に基づく推進が必須であるが、現在のわが国における在宅医療推進の科学的根拠の構築は必ずしも十分ではないと考えられる。本研究では、在宅医療にかかわる様々な因子を考慮したうえで、在宅医療の継続要因及び中断要因を明らかにし、在宅医療を推進するうえで不可欠な科学的根拠を構築することを目的として実施された。

本研究では、北関東に所在する医療機関で在宅医療に取り組んでいる診療所と、その診療所と

診療圏をほぼ同じくする病院の患者データを用い、在宅医療を受けた患者の特徴に関する要因を分析するとともに、在宅医療において最もよく遭遇し在宅医療継続あるいは中断（病院入院）の選択が発生しやすい「（肺炎等の表現型としての）発熱」をイベントとして、在宅医療を継続した群と、在宅医療を中断・病院入院した群との予後の比較を行い、両群における差異を分析したものである。

具体的には以下の4点を研究対象とした。

- ①A医療法人の3つの診療所で在宅医療を利用した患者の特徴を把握。
- ②A医療法人の1つの診療所で在宅医療を利用した患者のうち、「発熱」のイベントに対し、在宅で療養を継続した患者の特徴を把握。
- ③北関東地域において在宅医療を受ける患者のうち、「発熱」のイベントに対し、病院治療を希望し入院した患者の特徴の把握。
- ④北関東地域において「発熱」イベントを経験した患者で、在宅医療を継続した患者（在宅継続群）と在宅医療を中断して入院・治療を受けた患者（入院患者群）の両群の予後比較。

その結果、在宅継続患者の特徴、「発熱」イベントにおける在宅医療継続患者の特徴、「発熱」により（在宅医療を中断し）入院を選択した患者の特徴などが明らかとなり、さらに④の「発熱」をイベントとして在宅継続群と入院患者群の2群間での予後状態の比較（差）も明らかとなった。特に2群間の予後の差の分析では、入院患者群に比し在宅継続群において、生活機能、認知機能等の悪化が有意に抑制されており、在宅医療において頻出する「発熱」イベントにおいては、患者の生活機能維持や認知機能低下予防の視点から、在宅医療の継続に優位性の存在する可能性が明らかとなった。

3. 研究業績

【研究論文】

- 1) Harada K, Lee S, Park H, Shimada H, Makizako H, Doi T, Yoshida D, Tsutsumimoto K, Anan Y, Uemura K, Suzuki T. Going outdoors and cognitive function among community-dwelling older adults : Moderating role of physical function. *Geriatr Gerontol Int*, 16 (1) : 65–73, 2016.
- 2) Watanabe Y, Hirano H, Arai H, Morishita S, Edahiro A, Suzuki T. Relationship between frailty and oral function in community-dwelling elderly people. *J Am Geriatrics Soc.* (in press) 2016.
- 3) Tsutsumimoto K, Doi T, Shimada H, Makizako H, Yoshida D, Uemura K, Anan Y, Park H, Suzuki T. Self-reported exhaustion associated with physical activity among older adults. *Geriatr Gerontol Int*. 16 (5) : 625–630, 2016.
- 4) Uemura K, Shimada H, Doi T, Makizako H, Tsutsumimoto K, Park H, Suzuki T. Reduced prefrontal oxygenation in mild cognitive impairment during memory retrieval. *Int J Geriatr Psychiatry*. 31 (6) : 583–591, 2016

- 5) Shimada H, Uemura K, Makizako H, Doi T, Lee S, Suzuki T. Performance on the flanker task predicts driving cessation in older adults. *Int J Geriatr Psychiatry*, 31 (2) : 169–175, 2016.
- 6) Otsuka R, Kato Y, Nishida Y, Suzuki T, et al. Dietary diversity and 14-year decline in higher-level functional capacity among middle-aged and elderly Japanese. *Nutrition* 32 784–789, 2016.
- 7) Shimada H, Tsutsumimoto K, Lee S, Doi T, Makizako H, Lee S, Harada K, Hotta R, Bae S, Nakakubo S, Uemura K, Park H, Suzuki T : Driving Continuity in Cognitively Impaired Older Drivers. *Geriatr Gerontol Int*. 16 (4) : 508–514, 2016.
- 8) Doi T, Shimada H, Makizako H, Tsutsumimoto K, Hotta R, Nakakubo S, Suzuki T : Insulin-like Growth Factor-1 Related to Disability among Older Adults. *J Gerontol A Biol Sci Med Sci*. 71 (6) : 797–802, 2016.
- 9) Shimada H, Makizako H, Doi T, Tsutsumimoto K, Lee S, Suzuki T. Cognitive Impairment and Disability In Older Japanese Adults. *PLoS One*, 11 (7) : e0158720, 2016.
- 10) Nakakubo S, Doi T, Makizako H, Tsutsumimoto K, Hotta R, Ono R, Suzuki T, Shimada H. Sleep Duration and Excessive Daytime Sleepiness Are Associated With Incidence of Disability in Community-Dwelling Older Adults. *J Am Med Dir Assoc*, 17 (8) : 768.e1–768.e5, 2016.
- 11) Shimada H, Makizako H, Lee S, Doi T, Lee S, Tsutsumimoto K, Harada K, Hotta R, Bae S, Nakakubo S, Harada K, Suzuki T. Impact of Cognitive Frailty on Daily Activities in Older Persons. *J Nutr Health Aging*, 20 (7) : 729–735, 2016.
- 12) Tsutsumimoto K, Doi T, Shimada H, Makizako H, Yoshida D, Uemura K, Anan Y, Park H, Suzuki T : Self-reported exhaustion associated with physical activity among older adults. *Geriatr Gerontol Int*. 16 (5) : 625–630, 2016.

【獲得した研究費】

年度	研究事業	研究課題名	主任 /分担	補助申請額 (千円)	エフォート (%)
27	愛知県委託事業	徘徊高齢者の効果的な搜索に関する研究等事業	主任	10,780	10
27	長寿医療研究開発費	要介護高齢者、フレイル高齢者、認知症高齢者に対する栄養療法、運動療法、薬物療法に関するガイドライン作成に向けた調査研究	分担	1,000	5
27	厚生労働科学特別研究事業	後期高齢者の保健事業のあり方に関する研究	主任	5,884	5

1. 研究課題

加齢・発達に関する心理学的研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の就業に関する研究

シニアライフ研究会を組織し、O' Netを利用して日本の高齢者の就業に関する能力check法の開発を研究している。

(1) 高齢者のコミュニケーションに関する研究

高齢者コミュニケーション研究会を組織し、加齢性難聴、認知症、失語症を含む高齢者のコミュニケーションの支援方法に関して研究を行い、出版を企画している。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 一般社団法人日本認知症ケア学会認知症ケア用語辞典編纂委員会編、認知症ケア用語辞典（編纂委員として参加）、ワールドプランニング、2016.11.1
- 2) 日本心理学会監修、長田久雄・箱田裕司編、超高齢社会を生きる－老いに寄り添う心理学、誠信書房、2016.12.10.
- 3) 一般社団法人日本認知症ケア学会編、認知症ケア標準テキスト改定4版 認知症ケアの基礎、長田久雄・本間昭担当委員、ワールドプランニング、2016.11.25

【論文】

- 1) 渡邊美樹・鈴木みずえ・長田久雄、地域サロンに参加する女性高齢者の口腔の健康への認識と外出頻度との関連、2016.8、日本公衆衛生看護学雑誌、第5巻第2号、116-125
- 2) Ikeuchi, T., Lu, F.H., Holdsworth, J.K., Arun, Ö., Wang, S.T., Murakami, I., Osada, H., Higher education in gerontology : A comparison of master's programs in Japan, Taiwan, and Turkey., 2016.9.21., Gerontology & Geriatrics Education, 1-15.

【学会発表】

- 1) 中村桃美・石橋智昭・長田久雄・岡真人、シルバー人材センターにおける配分金額の分布と会員の満足度—都市部A市センターの会員調査から—、2016.6.11.（会期：11日、12日）、日本老年社会学会第58回大会、日本老年社会学会、松山大学
- 2) 小林由美子・杉澤秀博・刈谷亮太・長田久雄、地域在住高齢者における健康関連の逆境に対するレジリエンスの構成概念、2016.6.11.（会期：11日、12日）、日本老年社会学会第58回大会、日本老年社会学会、松山大学
- 3) 中村桃美・石橋智昭・長田久雄、シルバー人材センターのホワイトカラー出身会員の希望職群への就業の有無と退会、2016.10.28.（会期：26日、27日、28日）、第75回日本公衆衛生学会大会、日本公衆衛生学会、グランフロント大阪
- 4) 刈谷亮太・田中元基・長田久雄、高齢者における自己の多様性と喪失の受容との関係、2016.10.29、第11回日本応用老年学会大会、日本応用老年学会、大阪大学豊中キャンパス
- 5) 崎山みゆき・柴田博・長田久雄、「産業ジェロントロジーアドバイザー」養成事業における高齢者雇用促進としての老年学、2016.10.29、第11回日本応用老年学会大会、日本応用老年学会、大阪大学豊中キャンパス

【科研費などの助成金】

- 1) 基盤研究（A）研究代表者 東京都健康長寿医療センター 藤原佳典 分担者 長田久雄
研究課題名 大都市求職高齢者の実態解明およびシームレスな社会参加に向けた研究
- 2) 基盤研究（C）研究代表者 日本医療科学大学 森田恵子 分担者 長田久雄
研究課題名 高齢患者の簡易的聴覚機能評価の開発と効果的な言語的コミュニケーション方法の解明
- 3) 基盤研究（C）研究代表者 北星学園大学 田辺毅彦 分担者 長田久雄
研究課題名 特別養護老人ホームにおける持続可能な介護システムの研究
- 4) 基盤研究（C）研究代表者 横浜市立大学 服部紀子 分担者 長田久雄
研究課題名 在伯日系高齢者の心理社会的発達に関する縦断的研究
- 5) 基盤研究（C）研究代表者 京都ノートルダム女子大学 加藤佐千子 分担者 長田久雄
研究課題名 後期高齢者の「低栄養」を予防するための「食と心理的支援」の研究

1. 研究課題

- (1) 高齢者の地域のネットワークづくりの方法
- (2) ケアマネジメント研究のまとめについて
- (3) 災害時のソーシャルワークについて
- (4) ソーシャルワークの評価について
- (5) 福祉用具専門相談員の福祉用具サービス計画作成過程について
- (6) 社会福祉士養成教育カリキュラム見直しの評価研究
- (7) 北東アジアのソーシャルワーク国家資格の国際比較

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の地域のネットワークづくりの方法

実践的な観点から個人支援と地域支援を結びつけることとして、地域のネットワークづくりについて一定の研究成果を得ることが出来た。先駆的な地域包括支援センターでの地域ニーズの導き出し方およびニーズの充足方法についての昨年の質的研究の結果に加えて、地域包括支援センター管理者を対象とした量的研究の結果をもとに、個人や家族を支援するケースマネジメントと地域やそこの組織を支援するコミュニティマネジメントはニーズを捉えて、ニーズ充足の計画の作成・実施によることで基本的に同じプロセスであること、同時に両者はフィードバックし合うことを明らかにした。

(2) ケアマネジメントの研究のまとめについて

ケアマネジメントに関する多くの論文を書いてきた。さらには、ケアマネジメントに関する評価研究を、いくつかの研究助成費をもとに実施し、特に長期に亘り老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）「介護支援専門員の資質向上とケアマネジメントのあり方に関する調査・研究事業」（研究代表：白澤政和）でもって進めてきた。これらをもとに、ケアマネジメントについての今までの研究を整理し、『ケアマネジメントの本質』という著書の刊行を準備する。

(3) 災害時のソーシャルワーク実践について

災害ソーシャルワークの枠組みを明らかにし、具体的に展開すべく、一昨年の三菱財団からの「災害ソーシャルワークの理論化と教材開発・教育方法の体系化に関する研究」への研究助成および昨年度のフランスベッド・メディカル ホームケア研究・助成財団からの助成、今年度の福祉医療機構からの助成をもとに、社団法人日本社会福祉士養成校協会が受けて、外部から被災地へのソーシャルワーカー派遣マニュアルの作成を行い、研修を行った。次年度の課題としては、マニュアルの刊行にあり、それで一応の研究の区切りをつける。

(4) ソーシャルワークの評価研究

「科学研究費助成事業科学研究費補助金（基盤B一般）の「ソーシャルワーク・ケアマネジメントの独自性とその評価に関する研究」（H28～32）を進めており、5年間の研究であるが、高齢者を対象とする介護支援専門員と障害者を対象にする相談支援専門員を対象に、利用者とマッチングした評価研究を実施する。ケアマネジメントについてはソーシャルワーク化してきており、その機能がどの程度果たされているかを明らかにする。そこから、障害者支援と高齢者支援を生活の連続性という視点から、どのような対応が必要かも明らかにしていく。

さらに、ソーシャルワークの評価について、平成24年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A））「ソーシャルワークの評価方法と評価マニュアル作成に関する研究」（研究代表：白澤政和）でもって実施してきたが、その結果をもとに、継続して「ソーシャルワーク実践の評価マニュアル」および「ソーシャルワーク制度の評価マニュアル」の作成を進めた。

(5) 福祉用具専門相談員の福祉用具サービス計画作成過程について

2018年度から制度化される上級の福祉用具専門相談員の研修の枠組について、昨年度に『専門的知識、経験を有する福祉用具専門相談員の配置に向けた研修カリキュラム等に関する調査研究事業報告書』（一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会）をまとめたが、今年度は実際に研修を行い、その評価を行った。これは、『福祉用具専門相談員の適正配置に関わる養成モデル事業報告書』（一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会）でもってまとめた。

(6) 社会福祉士養成教育カリキュラム見直しの評価研究

社会福祉士の養成カリキュラムが2012年度に見直されたが、その結果についての評価研究を、日本社会福祉士養成校協会が厚生労働省からの研究助成を受けて行ってきたが、特に、大幅な変更のあった実習についての評価分析を行った。これをもとに、次期の社会福祉士カリキュラム改正に向けての検討を行った。

(7) 北東アジアのソーシャルワーク国家資格の国際比較

科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）でもって「北東アジアのソーシャルワーク国家資格の相互互換に向けての国際比較研究」（H28～30）を始めたが、今年度は、日本、中国、韓国、台湾でのソーシャルワーク国家資格の比較一覧を完成させることができた。次年度については、個々の国家資格がどのような方向に進んでいくのかの比較検討を行う。

3. 研究業績

【編著書】

- 1) 「第3章 認知症の人と地域包括ケア」白澤政和、pp.60～pp.98、「第8章 認知症に関わる制度の理解と活用」白澤政和、pp.298～pp.318、『認知症ライフパートナー検定試験公式テキスト1級』一般社団法人日本認知症コミュニケーション協議会、2016年
- 2) 「はじめに」「介護保険制度改正等の状況と課題」pp.78～81、「2014（平成26）年の介護保険制度改正の内容」pp.82～96、「地域包括ケアシステム構築に向けた介護支援専門員の役割」pp.97～121、白澤政和、編集：白澤政和他『介護支援専門員現任研修テキスト第1巻 専門研修課程Ⅰ』中央法規出版、2016年
- 3) 「はじめに」「介護保険制度改正等の状況と課題」pp.1～5、「（平成26）年の介護保険制度改正の内容」pp.6～29、「地域包括ケアシステム構築に向けた介護支援専門員の役割」pp.30～56、白澤政和、編集：白澤政和他『介護支援専門員現任研修テキスト第2巻 専門研修課程Ⅱ』中央法規出版、2016年
- 4) 「はじめに」「介護保険制度改正等の状況と課題」pp.1～5、「2014（平成26）年の介護保険制度改正の内容」pp.6～29、「地域包括ケアシステム構築に向けた介護支援専門員の役割」pp.30～51、白澤政和、『介護支援専門員現任研修テキスト第4巻 主任介護支援専門員更新研修』中央法規出版、2016年
- 5) 『介護支援専門員実務研修テキスト 上巻』編集：前沢政次・白澤政和他、一般財団法人長寿社会開発センター、pp.1～675、2016年
- 6) 「ケアマネジメントの理解と展開」白澤政和、編集：前沢政次・白澤政和他『介護支援専門員実務研修テキスト上巻』一般財団法人長寿社会開発センター、2016年
- 7) 『介護支援専門員実務研修テキスト下巻』編集：前沢政次・白澤政和他、一般財団法人長寿社会開発センター、pp.1～451、2016年
- 8) 「地域援助技術」白澤政和pp.299～353、編集：白澤政和他『介護支援専門員現任研修テキスト第4巻主任介護支援専門員研修』中央法規出版、2016年
- 9) 『地域包括・在宅介護支援センターによる地域づくり実践マニュアル』座長：白澤政和、全国地域包括・在宅介護支援センター協議会、pp.1～30、2016年

【事典】

- 1) 『認知症ケア用語辞典』編纂委員：白澤政和、一般社団法人日本認知症ケア学会認知症ケア用語辞典編纂委員会、ワールドプランニング、pp.1～410、2016年

【論文】

- 1) 「訪問リハビリテーションサービスを提供する理学療法士・作業療法士の連携の様態－ケアマネジャーとの関係を中心に－」丹野克子・照井孫久他、『保健医療福祉連携』Volume9, No.1、日本保健医療福祉連携教育学会、pp.21～28、2016年

- 2) 「施設のケアプランの課題」白澤政和、『ケアマネジメント学』2016 No.15、一般社団法人日本ケアマネジメント学会、pp.10～14、2016年
- 3) 「訪問リハビリテーションサービスの提供内容に対するケアマネジャーの認識」丹野克子・白澤政和、『東北理学療法学』第28号、日本理学療法士協会 東北ブロック協議会、pp.74～83、2016年
- 4) 「在宅ケア学と地域包括ケアシステム」白澤政和、『日本在宅ケア学会誌』Vol.20, No.1, September, 2016、pp.9～15、2016年
- 5) 「認知症とともに生きる人のケアマネジメントを普及するために」白澤政和、老年精神医学雑誌第28巻第3号、pp.291～298、2017年

【報告書】

- 1) 『平成27年度老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業）ケアマネジメントの効果的運用に関する調査研究報告書』委員長：白澤政和、一般社団法人日本ケアマネジメント学会、pp.1～142、2016年
- 2) 『専門的知識、経験を有する福祉用具専門相談員の配置に向けた研修カリキュラム等に関する調査研究事業報告書』伊藤利之・白澤政和他、一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会、pp.1～144、2016年
- 3) 『平成28年度有料老人ホーム事業高齢者雇用推進事業報告書』委員長：白澤政和、公益社団法人全国有料老人ホーム協会 有料老人ホーム事業高齢者雇用推進委員会、pp.1～97、2017年
- 4) 『平成28年度老人保健事業推進費等補助金福祉用具専門相談員の適正配置に関わる養成モデル事業報告書』伊藤利之・白澤政和他、一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会、pp.1～94、2017年
- 5) 『平成28年度災害福祉支援活動研修等実施事業報告書』委員長：白澤政和、一般社団法人日本社会福祉士養成校協会、pp.1～28、2017年
- 6) 『高齢者が自立（自律）し、尊厳ある生活を地域で送るための支援ならびに支援体制のあり方について報告書』座長：白澤政和、全国地域包括・在宅介護支援センター協議会、pp.1～36、2016年

【学会発表】

- 1) “Thought on Community Promotion of Health Care system:Anticipation of community resource, NGOs, and University’s devotion on talent cultivation” Masakazu Shirasawa, Collaboration among East Asian cities to ensure the elderly are guaranteed a century of health and well-being , May 13, 2016, East Asia YMCA Urban Network , Taichung, Taiwan, 2016
- 2) 基調講演「地域包括ケアにおけるケアマネジメントの今後の展開」白澤政和、『日本認知症ケア学会誌 第17回日本認知症ケア学会大会プログラム・抄録集』2016. Vol.15-1、一般社団法人日本認知症ケア学会、P.33、2016年

- 3) “The Past, Present and Future of Field Education for Would be Certified Social Workers in Japan” SHIRASAWA Masakazu, SWSD 2016 The Progressive Future Direction for Social Welfare Education for Korea and Japan , June 29, Seoul, Korea, pp.139~165, 2016
- 4) “Social Welfare Agency’ s Recognition and their Employment” Yomei Nakatani, Masakazu Shirasawa, the other, JOINT WORLD CONFERENCE ON SOCIAL WORK, EDUCATION AND SOCIAL DEVELOPMENT 2016, June 27 – 30, Seoul, Korea, 2016
- 5) “Basic Qualifications of Case Managers Determine “Jiritsu” [Autonomy/Independence] Enhancement Methodology” Masakazu Shirasawa, JOINT WORLD CONFERENCE ON SOCIAL WORK, EDUCATION AND SOCIAL DEVELOPMENT 2016, June 27 – 30, Seoul, Korea, 2016
- 6) “Relationship between the Practice of the Care Planning and related factors and the Gathering Information in Assessment by Care Managers ” Takako Ayabe and Masakazu Shirasawa, JOINT WORLD CONFERENCE ON SOCIAL WORK, EDUCATION AND SOCIAL DEVELOPMENT 2016, June 27 – 30, Seoul, Korea, 2016
- 7) 「次期診療・介護報酬同時改定とケアマネジメントの展望」白澤政和、『老年社会科学』第38巻第2号、日本老年社会科学会、pp.176~179、2016年
- 8) シンポジウム「ソーシャルワーク教育の新たな発展をめざして」コーディネーター・基調報告：白澤政和、『第46回全国社会福祉教育セミナー千葉2016』淑徳大学セミナー実行委員会・セミナー企画委員会、pp.43~66、2016年
- 9) 「新福祉ビジョン特別委員会「最終報告（案）」と今後予定される社会福祉養成制度改革への対応～推進補助金事業（要請見直し権等事業）の進捗報告」白澤政和、『第46回全国社会福祉教育セミナー緊急企画』新福祉ビジョン特別委員会、pp.1~78、2016年
- 10) “The ideal working situation for residential social workers at intensive care homes” Masakazu Shirasawa and et.al., ILPN CONFERENCE 2016 Abstracts, p.71, London, 2016
- 11) 「日本におけるケアマネジメントの導入過程と実行課題 –韓国はいかにケアマネジメントを導入すべきか–」白澤政和、Korea Academy of Care Management, 2016年韓国ケアマネジメント学会秋季学術大会、pp.23~65、2016年

【その他】

- 1) 「特定施設に住まう認知症の人への生活支援」事例解説：白澤政和、『Dementia Support』2016 2nd、エーザイ株式会社、pp.26~29、2016年
- 2) 「書評：『地域包括ケアと地域医療連携』（二木立著、勁草書房、2015年）」白澤政和、『コミュニティソーシャルワーク』17号、日本地域福祉研究所、p.72、2016年
- 3) 「介護保険のしくみ 創設の目的と制度の概要」「サービス利用の過程と現状」「地域包括ケアシステムとその将来」「介護保険制度の改正と今後の課題」白澤政和、『NHK社会福祉セミナー』NHK出版、pp.22~37、2016年

- 4) 連載「白澤教授のケアマネジメント快刀乱麻」白澤政和、『シルバー産業新聞』第84回「ケアマネジャーは法定研修で何を学ぶか① 新しい法定研修体系の課題」第234号、第85回「ケアマネジャーは法定研修で何を学ぶか② 実務研修を有効にするために」第235号、第86回「ケアマネジャーは法定研修で何を学ぶか③ キャリアパスとして専門研修の充実を」第236号、第87回「ケアマネジャーは法定研修で何を学ぶか④ 主任介護支援専門員および更新研修の充実に向けて」第237号、第88回「ケアマネジャーは法定研修で何を学ぶか⑤ 同行型研修の実施に向けて」第238号、第89回「海外から日本のケアマネジメントをみる (1) 台湾でのケアマネジメント① 3段階の認定業務も担う」第239号、第90回「海外から日本のケアマネジメントをみる (2) 台湾でのケアマネジメント② 行政組織に属するケアマネジャー」第240号、第91回「海外から日本のケアマネジメントをみる (3) ドイツでのケアマネジメント① 介護保険制度とケースマネジメント」第241号、第92回「海外から日本のケアマネジメントをみる (4) ドイツでのケアマネジメント② ケースマネジメントの内容 (その1)」第242号、2016年、第93回「海外から日本のケアマネジメントをみる (5) ドイツでのケアマネジメント③ ケースマネジメントの内容 (その2)」第243号、第94回「海外から日本のケアマネジメントをみる (6) ドイツ・マインツ市でのケースマネジメント①」第244号、第95回「海外から日本のケアマネジメントをみる (6) ドイツ・マインツ市でのケースマネジメント②」第245号、2017年

【科研費などの助成金】

- 1) 科学研究費助成事業 学術研究助成基金助成金 挑戦的萌芽研究「北東アジアのソーシャルワーク国家資格の相互互換に向けての国際比較研究」(H28～30)
- 2) 科学研究費助成事業 科学研究費補助金 基盤B一般「ソーシャルワーク・ケアマネジメントの独自性とその評価に関する研究」(H28～32)

1. 研究課題

- (1) 高齢者の健康の社会階層による格差
- (2) 中年期男性の職業、経済、健康のダイナミクスに関する研究
- (3) 透析患者における健康格差の要因と支援策に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者における健康の社会階層による格差

1) 高齢期の日常生活動作の所得階層による格差：年齢、時代、生年コホートによる違いはあるか
本研究では、高齢期の日常生活動作の所得階層による格差が年齢、時代そして生年コホートによって異なるか否かを、各要因の独自効果の検出が可能となる統計モデル（Cross-classified random effect model）を用いて分析した。加えて、時代や生年コホートによって社会階層の健康影響に差がみられた場合には、その差が各時代や生年コホートの社会経済的特性によって説明できるか否かについて分析した。データは国民生活基礎調査（1989年～2013年までの3年間隔9回分の調査）の個票であった。分析の結果、高齢期の日常生活動作の障害割合は低所得層の方が高所得層よりも有意に高いものの、この差は年齢階級によって異なり、80歳以上では低所得層の方が低くなること、格差の大きさは時代によって異なり、格差の拡大・縮小にはマクロ経済の動向（完全失業率）が関与していることが示された。この研究の結果は欧文誌に投稿中である。

2) ライフコースの視点からみた高齢期の健康格差の要因

本研究では、高齢期の健康の格差が、幼少期から高齢期に至るまでのライフコース上の経済的困窮の経験によってどの程度説明可能かを分析した。ライフコース上の経済的困窮が高齢期の健康に影響するモデルとして、以下4種類を設定した。高齢期以前のある時期の困窮が高齢期の健康に直接的に影響する（潜在効果モデル）、経済的困窮のパターン（経済的困窮からの回復、経済的困窮への転落など）によって高齢期の健康に及ぼす影響が異なる（移動効果モデル）、時期に関係なく経済的困窮の頻度が高齢期の健康に影響する（蓄積効果モデル）、幼少期の経済的困窮が青年期、中年期、高齢期の経済的困窮に影響し、その結果として高齢期の健康にも影響を及ぼす（継続効果モデル）。健康指標には、罹患疾患数、日常生活動作、認知障害、健康度自己評価、抑うつ症状を用いた。データは、東京都健康長寿医療センター研究所が米国のミシガン大学と共同で行っている研究の中で収集されたものである。分析の結果、健康指標によって妥当なモデルが異なることが明らかとなった。すなわち、継続効果モデルは高齢期のすべての健康指標に妥当であること、潜在効果モデルは疾患罹患数に、蓄積効果モデルは罹患疾患数、健康度自己評

価および抑うつ症状に、移動効果モデルは健康度自己評価と抑うつ症状に対して妥当であることが示された。

3) 高齢期の社会階層と健康の社会・心理的媒介要因

本研究では、高齢期の運動習慣の社会階層格差の媒介要因を、健康、心理、社会、環境の面から分析した。データは、「高齢者における社会的不利の重層化の機序とその制御要因の解明」の研究プロジェクトによって収集されたものである。媒介要因は多重媒介モデル (multiple mediator model) を使用して解明した。分析の結果、教育および収入の格差は、自己効力感、社会的支援、健康度自己評価を媒介要因として説明され、中でも自己効力感によって最も大きく説明されること、社会的支援については、教育の格差よりも収入による格差を説明する媒介要因であることなどが明らかにされた。この研究の結果は欧文誌に投稿中である。

(2) 中年期男性の職業、経済、健康のダイナミクスに関する研究

本研究の目的は、中年期男性を対象に、職業生活が経済、健康に与える影響を解明するとともに、この結果を、高齢者等の雇用の安定に関する法律の改定前（2006年）の調査結果（1999年実施）と比較することで、法律改定の影響を評価することにある。具体的には、量的研究では、職業生活の健康と経済への影響を明らかにするとともに、その結果を1999年に実施した調査と比較することで、雇用延長施策の影響について考察する。質的研究では、雇用延長施策への賛否の理由を、調査時点の職業、家族、健康、社会活動の各側面から明らかにする。研究方法については、量的研究の対象は、55～64歳男性の2,500人で、訪問面接調査を実施する。質的研究では、量的研究の調査協力者のうち、雇用延長政策への賛同者と反対者各10名を対象に、半構造化面接調査を実施する。

今年度は、量的研究の実査を終了した。次年度は、量的研究のデータ解析と質的研究のデータの収集と分析を実施する予定である。

以上の研究は、主として、科学研究費助成事業「高齢者における社会的不利の重層化の機序とその制御要因の解明」（研究代表者：杉澤秀博）の助成を受けて行った。共同研究者は、原田謙氏（実践女子大学）、杉原陽子氏（鎌倉女子大学）、柳沢志津子氏（徳島大学）、新名正弥氏（桜美林大学）である。

(3) 透析患者における健康格差の要因と支援策に関する研究

本研究の目的は、透析患者の健康を身体的、精神的、社会的側面から多角的に評価するとともに、それらが経済状況とライフコースによってどのように異なるか、さらに周囲からのどのような支援が健康度の向上に貢献するかを明らかにすることにある。この研究の特徴は以下の点にある。第1に代表性の高い標本を確保している。既存の研究では、一部の透析医療機関の患者や患者会の会員を標本としたものが多く、標本の代表性が疑問視されてきた。本研究では、日本透析医会の会員医師全員に調査協力依頼をすることで、特定の医療機関や患者組織に限定した標本よりも、より代表性のある標本を対象とした調査を実施することができる。第2に、健康状態を多

角的に評価している。透析患者の場合、腎臓機能の回復は望めないものの、透析管理をきちんと行い、日常生活の自立度を保持し、精神的にも社会的にも良好な状態を実現することは可能である。既存の研究では、一部の健康指標に着目し、その指標の改善を目指したものが多かった。本研究では、透析管理、生活の自立度、精神的・社会的状態を多角的に評価し、これらの指標すべてが良好な状態にある患者を特定することで、このような状態を実現するための方策を明らかにする。第3に正確な臨床情報が入手できる。透析管理の充分さを評価する検査数値や合併症の発症などの臨床情報については、患者よりも医療機関から入手した方が正確である。本研究では、患者だけでなく、医師を対象とした調査を実施することで、正確な患者の臨床情報を入手する。第4に、健康格差の要因を明確にすることができる。透析患者の場合、医療費の負担はかなり軽減されている。しかし、透析に伴う就労、家族などへの影響もあり、ライフコースの面からみるとかなり不利な経験をしている患者も少なくない。しかし、透析に伴うライフコース上の経験が健康格差にどのように関連しているかについてはほとんど解明されていない。本研究では、透析導入時期やそれに伴うライフコース上の出来事が、透析患者の健康格差の発生にどの程度関与しているかを解明する。

今年度は、日本透析医会の会員医師全員に調査協力依頼し、医師調査と患者調査を実施した。その結果、患者と医師のペアの調査票が約7500回収された。

以上の研究は、一般財団法人統計研究会の自主研究に関する研究助成「透析患者における健康格差の要因と支援策に関する研究」（研究代表者：杉澤秀博）を受けて行った。共同研究者は、清水由美子氏（東京慈恵会医科大学）、熊谷たまき氏（順天堂大学）、杉崎弘章氏（日本透析医会）、大平整爾氏（日本透析医会）、篠田俊雄氏（日本透析医会）である。

3. 研究業績

【論文】

- 1) Sugisawa, H., Harada, K., Sugihara, Y., Yanagisawa, S., Shinmei, M. (2016) . Socioeconomic status and self-rated health of Japanese people, based on age, cohort, and period. *Population Health Matrics*. 14. 27.
- 2) Sugisawa, H., Shimizu, Y., Kumagai,T., Sugisaki, H., Ohira, S, Shinoda T. (2016) . Effects of socioeconomic status on physical and mental health of hemodialysis patients in Japan : differences by age, period, and cohort. *International Journal of Nephrology and Renovascular Disease*. 9. 171 – 182.
- 3) Saito, T., Sugisawa, H., Harada, K., Kai, I. (2016) . Population aging in local areas and subjective well-being of older adults: Findings from two studies in Japan. *BioScience Trends*. 10 (2) . 103 – 112.
- 4) Sugisawa, H., Shimizu, Y., Kumagai,T., Sugisaki, H., Ohira, S, Shinoda T. (2016) . Earthquake preparedness among Japanese hemodialysis patients in prefectures heavily damaged by the 2011 Great East Japan Earthquake. *Therapeutic Apheresis and Dialysis*. (accepted)

- 5) 深谷太郎・小林江里香・杉澤秀博・Liang Jersey・秋山弘子. (2016). 高齢者の電子メールおよびインターネット利用に関連する要因. 老年社会科学. 38 (3). 319-328.
- 6) 吉田綾子・杉澤秀博. (2017). 地域包括支援センター総合相談の実践プロセス—経験5年以上の社会福祉士へのインタビュー調査から—. 老年学雑誌. 掲載確定
- 7) 奥山陽子・杉澤秀博・長田久雄. (2017). 被害高齢者における語り部活動の開始・継続プロセス：新潟水俣病の事例. 老年学雑誌. 掲載確定.
- 8) 新名正弥・杉澤秀博・杉原陽子・原田謙・柳沢志津子. (2017). 政治的有効性感覚と組織参加の世代差. 老年学雑誌. 掲載確定.

【学会・招待発表】（筆頭著者のみ）

- 1) 杉澤秀博「社会関係と健康に関する研究の展開と課題」シンポジウム『社会学の応用と公衆衛生実践・研究の新たな展開』 第75回日本公衆衛生学会総会、大阪
- 2) 杉澤秀博・他、「高齢者の日常生活動作の所得階層による格差：年齢、時代、生年コホートによる違いはあるか」 日本老年社会科学会第59回大会、松山

【科研費などの助成金】

- 1) 科研費「高齢者における社会的不利の重層化の機序とその制御要因の解明」（研究代表者）
- 2) 科研費「学際アプローチによる高齢者のセクシュアリティと心身の健康・社会経済状態の実証研究」（分担研究者）
- 3) 科研費「地域包括支援センターの保健師による地域診断活動の推進要因の分析—量的・質的な分析」（分担研究者）
- 4) 一般財団法人統計研究会自主研究に対する研究助成「透析患者における健康格差の要因と支援策に関する研究」（研究代表者）

1. 研究課題

介護予防に関する研究

2. 研究活動の概要

転倒に対する検知センサー付きスマホならびにPC管理システム等の開発研究の一環で、東京都調布市で転倒予防教室を実施し、その効果を検討する試み開始した。今年度は、2016年度は5回の教室を開催して、ミニ講座、運動指導をおこなった。転倒発生、筋力や歩行能力などの身体的要素、満足度やうつ状態などの精神的要素、人間関係などの社会的要素について追跡的に調査して効果を検討する。また、スマホによる検知の導入を図る予定である。

東京都中央区内で、認知症予防活動をも想定した、世代間交流プログラムの企画、運営に参加、協力した。

また、東京都立川市の老人ホームにおいて、転倒予防プログラムとして運動・体操教室を継続している。

さらに、研究員とともに考案したプログラム（ハッピープログラム）による地域高齢者のうつ予防を目的とした活動・研究を継続した。東京都府中市、神奈川県横須賀市などでプログラムを用いた教室を実施している。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 平松万由子、新野直明：グループホームにおける終末期ケア実践に関連する要因の検討：管理職に対する調査から、老年社会科学、査読有、37（4）、397-405、2016

【学会発表】

- 1) 金盛琢也、新野直明、他：転倒予防実践講座SAFETY on! 参加高齢者に対する啓発用教材の転倒予防効果、第21回老年看護学会、埼玉、2016年7月
- 2) Hiramatsu M, Niino N. : Study of factors related to the practice of end-of-life care in group homes, The 19th East Asian Forum of Nursing Scholars, Japan, 2016年3月

【科研費などの助成金】

- 1) 文科省科研費基盤B：高齢者のための在宅継続転倒予防プログラムと検知・支援モニタリング方法の開発と評価（分担）

【その他の活動】

- 1) 「老年医学 高齢者特有の病気・疾患」、多摩市市民講座老年学入門、2016年6月
- 2) 「高齢者のこころの健康について」、横須賀市ハッピープログラム研修、2016年7月
- 3) 「高齢者に多い肺炎について」、社会福祉法人至誠学舎立川至誠ホーム 国分寺地域相談センターなみき介護予防教室、2016年9月
- 4) 「生活場面からアセスメント生活リズム（睡眠）薬物による影響のアセスメント」、認定看護師教育課程 認知症看護コース、2016年10月

1. 研究課題

- (1) 高齢者の社会参加促進型ヘルスプロモーションに関する研究
- (2) 地域における高齢者の介護予防推進に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の社会参加促進型ヘルスプロモーションに関する研究

住民との話し合いを通じて、地域社会における高齢者の役割を住民が主体的に見直すことにより、高齢者の社会参加を促進し、その効果を検証することを目的として、札幌市に隣接するA地区を対象として、2010年から介入を継続している。これまでの介入のプロセスをコミュニティエンパワメントの要素（「相互作用」「課題解決への志向性」「社会資源の活用」「地域活動」）に着目して論文としてまとめ、「老年社会科学」に掲載された。

また、今年度は、同地域を対象として活動開始から7年後の地域へのネットワークの拡大や健康度及び介護予防への長期の波及効果を検証することを目的とした追跡調査を計画し、2017年3月に郵送調査を実施することになった。現在その準備が進められている。

さらに、2005年に北海道の南西部に位置するI町において実施した、地域社会における高齢者の役割見直しにより、社会参加を促進するプログラムで創出された住民による主体的な地域活動の10年間の経過及び地域活動の継続要因、課題を明らかにした。その結果、10年間継続した主体的な地域活動により高齢者の見守りや個別ケアにおける地域と支援者の協力関係にもつながっており、地域におけるケアの基盤が作られたことが示唆されたことを報告書としてまとめた。

(2) 地域における介護予防推進に関する研究

科研費による研究課題名「地域高齢者を学生に見立てたゼミナールによる新たな介護予防プログラムの提案」に関する最終年の計画を実施した。本研究は、地域の介護予防活動に関心のある中・高齢者を対象としたゼミナールを開講し、行政・地域包括支援センター等のゼミナール参加者と研究者が双方向性・相互啓発性の高い討論（学習）を繰り返す中で、地域特性に応じた介護予防プログラムの提案を目指すものである。2016年度は、厚木市N地区において、2016年5月～2016年10月にかけて5回のゼミナールを開催した。また、2016年12月にはN地区（介入）とA地区（対照）の65歳～79歳 1800名を対象として、活動の波及効果を検証するための郵送調査を行い、1145名（63%）から回答を得た。その結果を現在分析中である。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 佐藤美由紀、斉藤恭平、若山好美、芳賀博：アクションリサーチによる地域高齢者の社会参加促進型ヘルスプロモーション・プログラムのプロセス. 老年社会科学. 38 (1) . 3-20. 2016.
- 2) 芳賀博：地域におけるアクションリサーチへの期待. 老年社会科学. 38 (3) . 357-363. 2016.

【報告書】

- 1) 佐藤美由紀、斉藤恭平、芳賀博：高齢者の役割見直しによって創出された地域活動10年間のプロセス. ジェロントロジー研究報告（損保ジャパン日本興亜福祉財団）. No.12 79-91.

【学会発表】

I. 教育講演、フォーラム

- 1) 芳賀博、参加型アクションリサーチによる地域課題の解決、第56回健康社会学セミナー、理論講演、東洋大学ライフデザイン学部情報棟、2016.7.23
- 2) 芳賀博（世話人代表）、アクションリサーチにおけるプロセス分析、第75回日本公衆衛生学会総会 自由集会、大阪、2016.10.26

II. 一般演題

- 1) 佐藤美由紀、斉藤恭平、芳賀博、高齢者の役割見直しに基づく社会参加促進プログラム10年後の効果－ポピュレーションアプローチとしての効果が得られたのか－、日本老年社会科学会第58回大会、松山、2016.6.12
- 2) 佐藤美由紀、斉藤恭平、芝山江美子、芳賀博、高齢者の役割見直しにより創出された主体的地域活動が10年間継続された効果、第75回日本公衆衛生学会総会、大阪、2016.10.27
- 3) 犬塚剛、植木章三、吉田裕人、佐藤敬広、芳賀博、地域高齢者におけるBMIの低下に関連する要因、第75回日本公衆衛生学会総会、大阪、2016.10.28
- 4) 植木章三、安田友紀、竹内亮、金子勝司、陳洋明、曾根裕二、高戸仁郎、上出直人、萩原浩明、小柳達也、小川晃子、芳賀博、スマートフォンを活用した転倒予防の取り組み～転倒予防体操の効果と普及の可能性～、第75回日本公衆衛生学会総会、大阪、2016.10.28
- 5) 高戸仁郎、植木章三、竹内亮、金子勝司、陳洋明、安田友紀、曾根裕二、上出直人、萩原浩明、小柳達也、小川晃子、芳賀博、自立および虚弱高齢者における足趾把持力の年代別比較、第75回日本公衆衛生学会総会、大阪、2016.10.28
- 6) 吉田裕人、植木章三、犬塚剛、佐藤敬広、芳賀博、地域高齢者における運動習慣と将来の認知機能低下との関連性、第75回日本公衆衛生学会総会、大阪、2016.10.26
- 7) 佐藤美由紀、芳賀博、高齢者の役割見直しにより創出された住民主体の地域活動が10年間継続された効果：住民相互の学習事業を創出したY地区における参加群と非参加群の比較、第11回日本応用老年学会、大阪、2016.10.29

- 8) Hiroto Yoshida, Shouzou Ueki, Takahiro Satoh, Go Inuzuka, Kiyomi Morita, Hiroshi Haga: Effects of social activities on cognitive function in Japanese older adults. The Gerontological Society of America 69th Annual Scientific Meeting, New Orleans. 2016.11.18

【科研費などの助成金】

1) 科学研究費 基盤研究 (C)

研究課題名: 住民主体による高齢者の地域活動促進プログラムの健康増進及び介護予防への長期効果 (代表)

2) 科学研究費 基盤研究 (B)

研究課題名: 地域高齢者を学生に見立てたゼミナールによる新たな介護予防プログラムの提案 (分担)

3) 科学研究費 基盤研究 (C)

研究課題名: 高齢者の社会参加促進プログラムは健康増進や近隣ネットワーク形成に寄与したか (分担)

1. 研究課題

- (1) 高齢者の就業支援のあり方に関する研究
- (2) 住宅改修が冬季の高齢者の健康指標に及ぼす影響
- (3) 地域在宅高齢者の食品摂取の多様性と健康に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の就業支援のあり方に関する研究

高齢者の就業理由からみた就業支援のあり方を就業理由の階層性の観点から検討した。わが国の高齢者の就業理由の大半は経済的理由であるが、ドイツとスウェーデンでは生きがいに関する理由が最も多い。貧困層の割合は経済的理由と正相関し、生きがいに関する理由と負相関を示すことから生きがい就業は、所得保障による生活の安定のもとに成り立つことが推察される。高齢者の就業理由はマズローの自己実現理論にある程度あてはまり、相互の関連と階層性があるものと考えられる。年金抑制などによる経済的理由の強化を高齢者の就業のインセンティブにすると健康を害しても働かざるをえない事態を招き好ましくない。一方、年金の充実が就業の抑制に作用する。矛盾を解消し働く理由を強化することで高齢者の就業を支援するためには、就業による収入の増加、働くことによる健康状態の維持・向上の見える化、経験・知識・能力向上のための支援などに取組むべき余地が大きいと考えられる。

(2) 住宅改修が冬季の高齢者の健康指標に及ぼす影響

本年度は住宅改修が冬季の高齢者の収縮期血圧（SBP）と室温及び温冷感との関連に及ぼす影響を検討した。公営住宅3住戸に対し、1住戸は未改修とし、他の住戸に、サッシ取替及び玄関気密改修（気密強化）、気密強化に加え玄関と壁の断熱改修（気密・断熱強化）を施した。2015年12月から2016年2月の間に、公募で募った高齢者30名に各住戸に11時から翌日12時まで滞在させた。各住戸への滞在順は無作為とした。就床は22時以降、起床は7時までとした。12～21時及び翌日の7～11時（居間滞在時）に測定した1時間毎の室温（1.1m高）、血圧（TM-2433, A&D社）、温冷感のデータに欠損のない27名（平均年齢69.6歳、男性12名、女性15名）を分析対象とした。一般線形モデルにて、住宅改修及び室温がSBPに及ぼす影響、および、温冷感及び室温がSBPに及ぼす影響を検討した。居間滞在時の室温に及ぼす住宅改修の主効果は、未改修に対し、気密強化（ $B=1.75^{\circ}\text{C}$ ）、気密・断熱強化（ $B=2.42^{\circ}\text{C}$ ）であった。室温はSBPに有意に関連し

($B = -1.9\text{mmHg}$) , 室温をモデルに投入した場合, 住宅改修の効果は有意ではなかった. とくに 18°C 未満時のSBP (平均 $147 \pm$ 標準偏差 21mmHg) は, より高い室温時のSBPより有意に高く, 24°C 以上時のSBP ($130 \pm 20\text{mmHg}$) と比較すると平均 17mmHg 高かった. 気密・断熱強化住戸では室温が 18°C を下回ることにはなかった. 温冷感及び室温を独立変数としたモデルでは, 室温の調整後も温冷感が有意にSBPに関連していた (室温調整済平均: 寒い~どちらともいえない: 139mmHg v.s. やや暖かい~暑い: 123mmHg) . 室温低下によりSBPは有意に上昇した. 気密・断熱強化住戸ではSBPが有意に高くなる室温 18°C 未満になることはなく, 住宅改修は室温の保持を介してSBPの低減に寄与すると考えられた. また, 主観的な温熱感もSBPに影響することが明らかとなった.

(3) 地域在宅高齢者の食品摂取の多様性と健康に関する研究

世田谷区では, 行政と区民, 学識経験者から構成される「きたざわ健康まねきの会」の取組みの一環として, 主菜と副菜を一緒にした「きたざわおかずサラダ」レシピを区民から公募し, レシピ集を作成し普及を図っている. 9月から12月に世田谷北沢総合支所の区民健診を受診した者に, 自記式調査票にて, レシピ集の入手, 閲覧状況, 閲覧後の食習慣等の変化等を調査し, 140名から回答を得た. 全対象の66.4%が冊子を読んでいた. 読んだ者の88.6%が野菜をもっと食べたいと思い, 50.5%が1日の中で野菜料理を1品プラスし, また, 55.8%が野菜をいつもより多く買うようになっており, 冊子の配布は野菜摂取量を増やす動機づけになっていると考えられた. 一方, 冊子のレシピを実際に作った者は冊子を読んだ者の19.8%にすぎなかった. 主食, 主菜, 副菜摂取状況をみると, 朝食および夕食で主食を食べない日があるとの回答が3割を超えていた. また, 主菜をとっている人は夕食では81.2%と多いが, 朝食では35.5%と少なく, また, 昼食でも56.7%と6割に満たなかった. 副菜を毎日とる人は夕食で71.6%であったが, 朝食では24.6%, 昼食でも46.8%と少なかった. 食育において, 食事に主食, 主菜, 副菜を揃えることの意義の教育をより強化する必要があると考えられる.

3. 研究業績

【著書】

- 1) 渡辺修一郎: 第9章 高齢者の健康管理 (野尻雅美監修) 最新保健学 - 公衆衛生・疫学. 173-192, 真興交易 (株) 医書出版部, 東京, 2016年9月10日.
- 2) 渡辺修一郎: 第4章 高齢者の健康と労働能力との相関 - 身体・精神機能の推移からみる労働可能な範囲 (藤原佳典, 南潮編) 就労支援で高齢者の社会的孤立を防ぐ - 社会参加の促進とQOLの」向上. 75-88, 93-98, ミネルヴァ書房, 東京, 2016年11月10日.
- 3) 渡辺修一郎: 第9章 高齢者の就業を支える重層的ケア - 保健・医療・福祉システムの視点から (藤原佳典, 南潮編) 就労支援で高齢者の社会的孤立を防ぐ - 社会参加の促進とQOLの」向上. 200-228, ミネルヴァ書房, 東京, 2016年11月10日.

【論文】

- 1) 渡辺修一郎：高齢者の就業理由からみた就業支援のあり方－就業理由の階層性の観点から．老年社会科学, 38 (4) : 465-472, 2017.
- 2) 長谷部雅美, 小池高史, 野中久美子, 深谷太郎, 李暎娥, 村山幸子, 渡邊麗子, 植木章三, 吉田裕人, 松本真澄, 川端千恵, 二瓶美里, 田中千晶, 亀井智子, 渡辺修一郎, 藤原佳典：一人暮らし高齢者における見守りセンサーを用いた在宅生活支援に関する検討－高齢者への健康調査と地域ケア機関への利用実態調査より．老年社会科学, 38 (1) : 66-77, 2016.
- 3) Fujiwara Y, Shinkai S, Kobayashi E, Minami U, Suzuki H, Yoshida H, Ishizaki T, Kumagai S, Watanabe S, Furuna T, Suzuki T. : Engagement in paid work as a protective predictor of basic activities of daily living disability in Japanese urban and rural community-dwelling elderly residents : An 8-year prospective study. *Geriatrics and Gerontology International*, 16 (1) : 126-34, 2016.
- 4) Saito T, Izawa KP, Watanabe S: Association Between the Functional Independence and Difficulty Scale and Physical Functions in Community-Dwelling Japanese Older Adults Using Long-term Care Services. *Journal of Geriatric Physical Therapy*, 2016 Nov 12, doi : 10.1519/JPT.000000000000103, 2016.
- 5) Saito T, Izawa KP, Omori Y, Watanabe S : The Functional Independence and Difficulty Scale : Instrument development and validity evaluation. *Geriatrics and Gerontology International*, 16 (10) : 1127-1137, 2016.
- 6) Saito T, Izawa KP, Watanabe S. : The relative and absolute reliability of the Functional Independence and Difficulty Scale in community-dwelling frail elderly Japanese people using long-term care insurance services. *Aging Clinical and Experimental Research*, 2016 May 5, doi : 10.1007/s40520-016-0577-7, 2016.
- 7) Saito T, Izawa KP, Matsui N, Arai K, Ando M, Morimoto K, Fujita N, Takahashi Y, Kawazoe M, Watanabe S. : Comparison of the measurement properties of the Functional Independence and Difficulty Scale with the Barthel Index in community-dwelling elderly people in Japan. *Aging Clinical and Experimental Research*, 2016 Mar 17, doi : 10.1007/s40520-016-0558-x, 2016.

【学会発表】

- 1) 藤原佳典, 南潮, 村山洋史, 倉岡正高, 村山幸子, 野中久美子, 岩田直子, 遠藤洋子, 小宮山恵美, 渡辺修一郎：生活機能の劣る高齢者は地域の互助を受け入れるか?. 第58回日本老年医学会学術集会. 2016年6月8日.
- 2) 渡辺修一郎：ディベートセッション5 地域在住高齢者の健康長寿と食品多様性 生活機能維持の観点から. 第58回日本老年医学会学術集会. 2016年6月9日.
- 3) 葛輝子, 渡辺修一郎, 本多淳：高齢生活習慣病外来通院患者の血清アルブミン値およびその変化に関連する要因. 第58回日本老年医学会学術集会. 2016年6月9日.

- 4) 南潮, 村山洋史, 倉岡正高, 村山幸子, 野中久美子, 岩田直子, 遠藤洋子, 小宮山恵美, 渡辺修一郎, 藤原佳典: タイプ別社会的孤立リスク者と生活機能低下の関連. 第58回日本老年医学会学術集会. 2016年6月9日.
- 5) 渡辺修一郎: 特別講演2高齢者の就労 その介護予防的意義から健康管理まで. 第58回日本老年医学会学術集会. 2016年6月10日.
- 6) 小川まどか, 栗延孟, 高橋龍太郎, 渡辺修一郎, 都築和代, 倉淵隆, 鳥海吉弘, 長井達夫, 宮良拓百, 甲野祥子, 岡島慶治: 気密・断熱性の異なる住戸における起立負荷試験時の血圧の変化. 第11回日本応用老年学会総会, 2016年10月29日.
- 7) 渡辺修一郎: シンポジウム4-1 高齢労働者の健康実態と健康管理のあり方. 第75回日本公衆衛生学会総会. 2016年10月26日.
- 8) 渡辺修一郎, 小川まどか, 栗延孟, 高橋龍太郎, 都築和代: 住宅改修が冬季の高齢者の収縮期血圧と室温 および温熱感との関連に及ぼす影響. 第75回日本公衆衛生学会総会. 2016年10月26日.
- 9) 石井義之, 野中久美子, 倉岡正高, 村山幸子, 田中元基, 安永正史, 松永博子, 松永佳子, 福島富士子, 渡辺修一郎, 藤原佳典: 重層的な地域多世代共助システム-生活支援サービス(1): 高齢者向け取組みの課題. 第75回日本公衆衛生学会総会. 2016年10月27日.
- 10) 福島富士子, 松永佳子, 野中久美子, 倉岡正高, 村山幸子, 石井義之, 田中元基, 安永正史, 松永博子, 渡辺修一郎, 藤原佳典: 重層的な地域多世代共助システム-生活支援サービス(2): 子育て世代向け取組みの課題. 第75回日本公衆衛生学会総会. 2016年10月27日.
- 11) 倉岡正高, 野中久美子, 村山幸子, 石井義之, 田中元基, 安永正史, 松永博子, 渡辺修一郎, 松永佳子, 福島富士子, 藤原佳典: 重層的な地域多世代共助システムの開発: 多世代相互支援推進協議会の運営. 第75回日本公衆衛生学会総会. 2016年10月27日.
- 12) 村山幸子, 松永博子, 倉岡正高, 野中久美子, 石井義之, 田中元基, 安永正史, 渡辺修一郎, 松永佳子, 福島富士子, 藤原佳典: 重層的な地域多世代共助システムの開発(2): 挨拶運動とキャンペーンの展開. 第75回日本公衆衛生学会総会. 2016年10月27日.
- 13) 久保野裕子, 井上智代, 飯吉令枝, 渡辺修一郎: 日本におけるがん患者の就労支援に関する文献調査. 第75回日本公衆衛生学会総会. 2016年10月27日.
- 14) 井上智代, 飯吉令枝, 渡辺修一郎: 豪雪地域における地域高齢者の食生活-食事バランス感に焦点をあてて-. 第75回日本公衆衛生学会総会. 2016年10月28日.
- 15) 箕浦明, 南潮, 鈴木宏幸, 倉岡正高, 野中久美子, 小池高史, 松永博子, 深谷太郎, 渡辺修一郎, 小林江理香, 藤原佳典: ESSENCE研究(1) 高齢者の求職活動の長期化が精神的健康度に与える影響. 第75回日本公衆衛生学会総会. 2016年10月28日.
- 16) 松永博子, 南潮, 鈴木宏幸, 倉岡正高, 野中久美子, 小池高史, 箕浦明, 深谷太郎, 渡辺修一郎, 小林江理香, 藤原佳典: ESSENCE研究(2) 中高年齢者向け就労支援施設に来所する人の類型. 第75回日本公衆衛生学会総会. 2016年10月28日.

【シンポジウム司会】

- 1) 渡辺修一郎, 藤原佳典: 高齢者の就業と健康. 第75回日本公衆衛生学会総会. 2016年10月26日.
- 2) 渡辺修一郎: 多世代共生コミュニティ構築に向けた重層的なコミュニケーションアプローチの展望: JST-RISTEX「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域より. 話題提供者: 藤原佳典, 村山幸子, 鈴木宏幸, 小川将, 第11回日本応用老年学会総会, 2016年10月29日.

【科研費などの助成金】

- 1) 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(A)): 大都市求職高齢者の実態解明およびシームレスな社会参加支援に向けた研究(分担研究者)
- 2) 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B)): 高齢者就業の新たな調整型支援システムの構築に関する総合的研究(分担研究者)
- 3) 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)): 台湾南部の津波とセーフティネットの基礎研究(分担研究者)
- 4) 国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)社会技術研究開発センター(RISTEX)戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発): ジェネラティビティで紡ぐ重層的な地域多世代共助システムの開発(分担研究者)

【その他の研究活動】

- 1) 東京都健康長寿医療センター研究所, 社会参加と地域保健研究チーム協力研究員として, 社会参加と地域保健に関する研究に従事.
- 2) 世田谷区の健康きたざわプラン推進委員として健康きたざわプランの評価に関する研究に従事.
- 3) 志木市介護保険事業計画策定委員会委員として志木市介護保険事業計画に関する調査研究に従事.
- 4) 世田谷区地域保健福祉審議会高齢者福祉・介護保険部会委員として世田谷区の介護保険事業計画に関する調査研究に従事.
- 5) 健康改修住宅の効果・効能研究委員会委員として健康改修住宅の効果・効能に関する研究に従事.

1. 研究課題

- (1) 高齢者と家族に関する研究
- (2) 高齢者の老後不安と老後準備に関する研究
- (3) 日本の階層意識に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者と家族に関する研究

戦後からこれまでの「家族と高齢者の関連」の変化と、家意識の変化を既発表のデータによってたどり、これまでの調査研究を批判的に検討することを目指した。1回目の論考をまとめつつあるが、これまでに目立っていた高齢者間のコホートによる差異が、今後は次第に消えていくという感触を得て問題提起をしたいと考えている。

(2) 高齢者の老後不安と老後準備に関する研究

もともと高齢者の間での社会経済的格差は大きいですが、いわゆる「格差社会」の到来によって、それがさらに増大してきた可能性があり、さらに家族関係による格差も広まっている。このような状況の中で経済的資源が乏しくても自らの心構えや老後準備、社会の支援によって高齢者を不安に陥れることを防ぐ地域の在り方や支援の枠組みに焦点を当てて研究している。まだ地域の取り組みをあれこれ収集している段階である。

(3) 日本の階層意識に関する研究

戦後の階層意識や階級意識論をたどり、直井自身の「中意識論」を改めてその流れの中に位置付けようと試みた。また最近のいわゆる「格差社会」における階層帰属意識のありようと日本人の多くが中階層に帰属意識を持ってきたことの関連について追究している。

3. 研究業績

【書評】

- 1) 直井道子 吉川徹著『現代日本の「社会の心」』有斐閣 2011

【その他の研究活動】

- 1) 日本学術会議 連携会員

今年度は第23期の日本学術会議連携会員として「社会変動と若者分科会」、「社会福祉学分科会」「高齢者の健康分科会」という3つの分科会に所属し、活動している。

- 2) 学会活動

日本社会学会

日本老年社会科学会（名誉会員）

日本家族社会学会

日本社会福祉学会（査読委員）

- 3) 研究（周辺）活動

老人医療センター研究所 協力研究員

老人医療センター研究所 倫理委員会委員

家計経済研究所 研究費助成審査委員会委員長（今年度3月まで）

- 4) 社会的活動

社会福祉法人（老人ホーム、デイサービスなど経営）真寿会理事・評議員

高等学校家庭科教科書 「家庭総合」ならびに「家庭基礎」3章「高齢社会を生きる」執筆

2016年検定済み 東京書籍

同 指導書 執筆 東京書籍

高等学校準教科書「生活と福祉」監修 「高齢化の現状と高齢者の特徴」大部分執筆

実教出版社

同 教授用指導書 図版解説、内容解説大部分執筆

1. 研究課題

在宅医療の継続要因に関する科学的根拠構築のための研究

2. 研究活動の概要

日本では超高齢社会の進展により、今後、高齢者特に後期高齢者の急増が確実である。後期高齢者の特徴として加齢に伴う生活機能の減衰と慢性疾患の増加は不可避であり、その主要な対策のひとつとして在宅医療の充実と普及が重要とされ推進が図られているところである。このような在宅医療の普及のためには、科学的根拠に基づく推進が必須であるが、現在の日本における在宅医療推進の科学的根拠の構築は必ずしも十分ではないと考えられる。

本研究では、在宅医療にかかわる様々な因子を考慮したうえで、在宅医療の継続要因及び中断要因を明らかにし、在宅医療を推進するうえで不可欠な科学的根拠を構築することを目的として実施した。本研究では、北関東に所在する医療機関で在宅医療に取り組んでいる診療所や病院の患者データを用い、在宅医療を受けた患者の特徴に関する要因を分析するとともに、在宅医療において最もよく遭遇し在宅医療継続あるいは中断（病院入院）の選択が発生しやすい「（肺炎の表現型としての）発熱」をイベントとして、在宅医療を継続した群と、在宅医療を中断・病院入院した群との予後の比較を行い、両群における差異を分析したものである。

具体的には以下の4点を研究対象とした。

- ①A医療法人の3つの診療所で在宅医療を利用した患者の特徴を把握。
- ②A医療法人の1つの診療所で在宅医療を利用した患者のうち、「発熱」のイベントに対し、在宅で療養を継続した患者の特徴を把握。
- ③A地域において在宅医療を受ける患者のうち、「発熱」のイベントに対し、病院治療を希望し入院した患者の特徴の把握。
- ④A地域において「発熱」イベントを経験した患者で、在宅医療を継続した患者（在宅継続群）と在宅医療を中断して入院・治療を受けた患者（入院患者群）の両群の予後比較。

その結果、在宅医療患者の特徴、「発熱」イベントにおける在宅医療継続受診患者の特徴、「発熱」により（在宅医療を中断し）入院選択患者の特徴などが明らかとなり、さらに④の「発熱」をイベントとして在宅医療継続群と病院入院群の2群間での予後状態の比較（差）も明らかとなった。特

に2群間の予後の差の分析では、病院入院群に比し在宅医療継続群において、生活機能、認知機能等の悪化が有意に抑制されており、在宅医療において頻出する「発熱」イベントにおいては、患者の生活機能維持や認知機能低下予防の視点から、在宅医療継続に優位性の存在する可能性が明らかとなった。

3. 研究業績

【論文】

- 1) Nariaki Shiraishi, Yusuke Suzuki, Daisuke Matsumoto, Seungwon Jeong, Motoya Sugiyama, Katsunori Kondo. Effects of a Self-Exercise Program on Activities of Daily Living in Patients After Acute Stroke : A Propensity Score Analysis Based on the Japan Association of Rehabilitation Database. Archives of Physical Medicine and Rehabilitation, 98 : 434–41, 2017
- 2) Yamanouchi A, Yoshimura Y, Matsumoto Y and Jeong S : Severely Decreased Muscle Mass among Older Patients Hospitalized in a Long-Term Care Ward in Japan. Journal Of Nutritional Science And Vitaminology, 62 (4) , 229–234, 201
- 3) 白石愛・吉村芳弘・鄭丞媛・辻友里・嶋津さゆり・若林秀隆：高齢入院患者における口腔機能障害はサルコペニアや低栄養と関連する。日本静脈経腸栄養雑誌, 31 (2) , 2016

【学会発表】

- 1) 鄭丞媛、井上祐介、斎藤民、村田千代栄、鈴木隆雄。行方不明になった徘徊高齢者の特徴と早期発見に関わる因子の探索。第11回日本応用老年学会大会, 2016.10, 大阪府豊中市
- 2) 竹田徳則、平井寛、近藤克則、加藤清人、鄭丞媛。通いの場は何名程度のボランティアで運営されているか？－JAGES参加8市町の分析。第75回日本公衆衛生学会総会2016.10.26－28 大阪府大阪市
- 3) 村田千代栄、斎藤民、鄭丞媛、井上祐介。認知症高齢者の徘徊対策の現状と課題：2015年度全国自治体実態調査の結果から。第75回日本公衆衛生学会総会2016.10.26－28 大阪府大阪市
- 4) 鄭丞媛、井上祐介、斎藤民、村田千代栄。A県徘徊高齢者の特徴：認知症高齢者の徘徊の実態（第1報）。第75回日本公衆衛生学会総会2016.10.26－28 大阪府大阪市
- 5) 井上祐介、鄭丞媛、斎藤民、村田千代栄。A県徘徊高齢者の特徴：4日以内に発見された者の特徴（第2報）。第75回日本公衆衛生学会総会2016.10.26－28 大阪府大阪市
- 6) 斎藤民、村田千代栄、井上祐介、鄭丞媛。A県徘徊高齢者の特徴：死亡例に関する記述的分析（第3報）。第75回日本公衆衛生学会総会2016.10.26－28 大阪府大阪市
- 7) 尾島俊之・竹田徳則・宮國康弘・相田潤・横山由香里・堀井聡子・村田千代栄・鄭丞媛・中村廣隆・岡田栄作・中村美詠子・斉藤雅茂・近藤尚己・近藤克則。認知症要介護認定に関連する環境要因：JAGESプロジェクト。第52回日本循環器病予防学会学術集会, 2016.6.17－18 埼玉県さいたま市

【科研費などの助成金】

- 1) ファイザーヘルスリサーチ振興財団第25回研究助成金「在宅医療における質の評価指標および在宅医療の継続要因の検証」（研究代表者：鄭丞媛）：2016年12月－2017年11月，助成金額：1,110,000円
- 2) 平成29年度長寿医療研究開発費（国立研究開発法人国立長寿医療研究センター）「第7期介護保険事業策定のための介護予防・日常生活圏域ニーズ調査データの分析支援プロジェクト」分担研究者（研究代表者：近藤克則）助成総額：4,000,000円
- 3) 平成29年度長寿医療研究開発費（国立研究開発法人国立長寿医療研究センター）「日本版 Age Friendly Cities（AFC）指標の信頼性・妥当性の検証」（研究代表者：鄭丞媛），助成金額：900,000円

【その他の研究活動】

- 1) 鈴木隆雄・鄭丞媛・井上祐介：在宅医療の継続要因に関する科学的根拠構築のための研究，公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団2015年度在宅医療研究への助成報告書，2016.3

1. 研究課題

実務経験ルートから介護福祉士の取得を目指す者に必要な支援に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 介護福祉士国家試験 受験対策図書の執筆

全国社会福祉協議会、中央法規出版、メディックメディアの受験対策図書の執筆を行った。

(2) 介護福祉士国家試験 受験対策セミナーの講師

横浜市福祉サービス協会、中央法規出版、カラーズ・コンサルティング、介護労働安定センター千葉支所の受験対策セミナーの講師を務めた。

3. 研究業績

【編著書】

- 1) 『社会福祉学習双書2016 第15巻 介護概論』共著、pp.168-176、澤田信子、大島憲子、井上千津子、岡田史、中山幸代、鈴木知佐子、石井享子、大根静香、伊藤八寿子、横井雅代、石井忍、久保田祐子、青木宏心、檜垣昌也、小櫃芳江、西井啓子、森由香子、全国社会福祉協議会、東京、2016年2月。
- 2) 『クエスチョンバンク 介護福祉士国家試験問題解説2017』共著、pp.13-14、青木宏心、赤羽克子、秋山美栄子、奥田紀久子、佐伯久美子、櫻井恵美、佐近慎平、佐々木宰、澤田如、鈴木政史、角田ますみ、宣賢奎、竹田幸司、竹原厚三郎、谷口泰司、中津川かおり、濱田竜也、松村美枝子、馬淵敦士、南牧生、宮崎伸一、メディックメディア、東京、2017年4月。
- 3) 『介護福祉士国家試験過去問解説集 2017』共著、pp.127-130、青木宏心、石井梨絵、石岡周平、伊東一郎、井上修一、大西典子、大谷佳子、亀島千枝、金美辰、小林哲也、小林俊子、小林瑠弥乃、高田明子、竹田幸司、谷功、千葉安代、中岡勉、長山圭子、能田茂代、野田由佳里、長谷川晴美、東野幸夫、東原由佳、堀米史一、本間美幸、前田美貴、宮元預羽、宗村操、森聖志、八城薫、山田誠峰、山田弥生、渡辺明広、渡邊祐紀、中央法規出版、東京、2017年4月。
- 4) 『介護福祉士国家試験 らくらく暗記マスター2017』共著、pp.14-69、青木宏心、佐伯久美

子、松崎匡、中央法規出版、東京、2016年7月。

- 5) 『介護福祉士国家試験 書いて覚える合格ドリル2017』共著、pp.14-20、pp.28-66、青木宏心、佐伯久美子、竹田幸司、渡邊祐紀、中央法規出版、東京、2016年8月。

【その他の研究活動】

1) セミナー

①公益財団法人かながわ福祉サービス振興会：「傾聴技能の実践的習得」（2016年6月9日）

2) 介護福祉士国家試験受験対策講座 講師

①カラーズ・コンサルティング：全科目（2016年10月2日）

②社会福祉法人横浜市福祉サービス協会：「介護の基本」、「生活支援技術」（2016年11月20日）

③カラーズ・コンサルティング：全科目（2016年11月6日）

④カラーズ・コンサルティング：全科目（2016年12月4日）

⑤中央法規出版：全科目（2016年12月17日）

⑥介護労働安定センター千葉支所：全科目（2016年12月18日）

⑦中央法規出版：全科目（2016年12月25日）

3) 介護職員初任者研修 講師

①藤沢市社会福祉協議会：「自立に向けた介護」（2016年10月24日）

②藤沢市社会福祉協議会：「介護の基本的な考え方」（2016年11月24日）

③藤沢市社会福祉協議会：「快適な住環境整備と介護」（2017年1月12日）

④藤沢市社会福祉協議会：「介護過程」（2017年2月16日）

4) 介護職員実務者研修講師養成 講師

①カラーズ・コンサルティング：「介護過程Ⅲ」（2016年7月～8月）

5) 社会的活動

①社会福祉法人仁正会 評議員

②社会福祉法人相模翔優会 第三者委員

1. 研究課題

- (1) 要介護認定を受けている高齢者の主観的健康感に関する研究
- (2) 通所ならびに訪問リハビリテーションを利用する要介護高齢者の自覚症状と主観的健康感の関連を明らかにする研究

2. 研究活動の概要

(1) 要介護認定を受けている高齢者の主観的健康感に関する研究

1) 要介護認定を受けている高齢者の主観的健康感の関連要因－文献レビュー－

従来、主観的健康感とは地域住民の客観的健康度を測定する代替手段として使用されてきた。しかし近年、疾患・障害をもつ人々を対象に主観的健康感に関する研究が見受けられる。本研究は、このような研究動向を踏まえ国内・外の既存の研究報告を整理し、主観的健康感に着目する意義について検討することを目的としている。研究の進捗状況として、現在国内の原著論文を「医中誌Web」ならびに「JDreamⅢ」で検索・収集し、全文を精読しているところである。

2) 要介護認定を受けている高齢者の主観的健康感の関連要因の特徴－同一地域在住の一般高齢者との比較－

近年、疾患・障害をもつ人々を対象に主観的健康感に関する研究が行われているが、そのなかで主観的健康感が良好と自己評価する人々がいるとの報告がある。なぜそのようなことが起こるのか？それは心理・社会的要因が影響していることが考えられる。しかし、疾患・障害のある人々でとりわけ心理・社会的要因が主観的健康感に影響するかは知られていない。そこで本研究は、同一地域に在住する要支援・要介護高齢者ならびに一般高齢者を対象に同一の質問紙（尺度）を使用し、主観的健康感の関連要因を比較することでその特徴を明らかにすることを目的とした。研究の進捗状況として、データはすでに収集しており分析も終了した。現在、学術雑誌に論文を投稿中である。

3) 要介護認定を受けている高齢者の主観的健康とは何かを明らかにする研究－質的研究－

要介護認定を受けている高齢者など、疾患・障害があっても自らの健康を良好と評価する者がいる。これらの人々の考える健康像とは何なのか？どのような状態を健康と捉えているのか？その本質についてほとんど知られていない。今日は疾病構造の変化で慢性疾患の時代となっている。疾患やそれに伴う障害を積極的に治療・改善していくことは重要であるが難しい現状もある。当事者が現状で考えている健康像を知ることができれば、よりよいサービスを提供すること

ができると考えられる。そこで本研究は、要介護認定を受けている高齢者が何をもって自分の健康度を判断するのか、その基準や健康と思える状態・体験を明らかにする。研究の進捗状況として、現在東京都内の特別養護老人ホームに入所する高齢者9名よりインタビューを終えた状況である。今後、内容を質的記述的に分析していく予定である。

(2) 通所ならびに訪問リハビリテーションを利用する要介護高齢者の自覚症状と主観的健康感の関連を明らかにする研究

分析を終えて「日本在宅ケア学会誌」の論文掲載が決まっている。概要は以下の通り。在宅の要支援・要介護高齢者の栄養リハビリテーションを実践するに当たり、栄養状態が変化したときにそれに気付ける視点が重要である。本研究は日常生活で頻度の高い排泄がその視点にならないかと考え、訪問リハビリテーションを利用する高齢者25名を対象にMNA-SFの栄養状態と排泄動作の自立度ならびに尿失禁の有無の関連を検討した。その結果、排泄動作の自立度と尿失禁の有無は栄養状態と有意に関連していた。このことから、作業療法士などの訪問リハ専門職は、これら排泄に関する評価や情報収集を行うことで、高齢者の栄養状態の変化に気付くことができる可能性が示唆された。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 池田晋平：通所ならびに訪問リハビリテーションを利用する要介護高齢者の自覚症状と主観的健康感の関連。日本在宅ケア学会誌、査読あり。（印刷中）
- 2) 池田晋平：訪問リハビリテーションを利用する高齢者における栄養状態と排泄動作および尿失禁の関連についての予備的研究。作業療法、査読あり。（印刷中）

【学会発表】

- 1) 「訪問リハビリ利用者のMNA-SFによる栄養評価と関連要因」池田晋平、小野寺悦子、伊藤賢司 第50回日本作業療法学会 平成28年9月9日～11日 札幌

【その他の研究活動】

- 1) 「大田区における作業療法士の復職・就労支援の実態」の研究代表者として活動。

1. 研究課題

- (1) 運動習慣のある地域在住高齢者の身体、精神機能、社会的紐帯などの縦断調査（8年目）
- (2) 座間市介護予防事業での認知機能低下予防教室の開催

2. 研究活動の概要

(1) 運動習慣のある地域在住高齢者の身体、精神機能、社会的役割などの縦断調査（8年目）

体操習慣のある地域在住高齢者の身体機能、生活機能および精神的健康度経年変化を明らかにするために、神奈川県相模原市のラジオ体操を実施している高齢者の身体機能測定、質問紙調査を実施した。

(2) 座間市介護予防事業での認知機能低下予防教室の開催

神奈川県座間市において、行政と協働して認知機能低下予防の介入に向けた認知機能スクリーニングおよび運動教室による介入を実施し、MCI高齢者の特性と睡眠障害の関係について検討した。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 植田拓也, 柴喜崇, 他. 軽度認知機能低下に関連する要因の検討－行政と共同した地域在住高齢者に対する調査－. 第17回早期認知症学会学術大会（熊本）, 2016年9月（第17回日本早期認知症学会若手奨励賞受賞）
- 2) 植田拓也, 柴喜崇, 他. 朝のラジオ体操会に参加する高齢者の5年間の脊柱後彎角度の変化と身体機能及び精神的健康度の関連, 第51回日本理学療法学術大会（札幌）, 2016年5月
- 3) 襖田桃子, 植田拓也, 他. 高次生活機能における軽度認知機能低下高齢者と健常高齢者の比較 主観的困難感に着目して. 第51回日本理学療法学術大会（札幌）, 2016年5月
- 4) 長田美沙季, 植田拓也, 他. 地域在住高齢者における自主参加型体操グループへの参加継続に関連する要因－5年間の縦断調査－. 第51回日本理学療法学術大会（札幌）, 2016年

【その他の研究活動】

●市民講座および講演

- 1) 植田拓也/認知症を予防する!?! - 認知症予防に効果のある運動体験講座 - / チャレンジデー2016 座間 / 2016年5月25日 / 座間市相模が丘コミュニティーセンター
- 2) 植田拓也/認知症予防と転倒予防/大田区機能訓練アドバイザー事業 (大田自由人くらぶ) / 2016年7月16日 / 大田区民プラザ
- 3) 植田拓也/ロコモティブシンドロームと転倒予防 - 誰にでもできる健康体操で健康寿命を延そう - / 大田区機能訓練アドバイザー事業 (ひろばの会) / 2016年7月28日 / 大田区雪谷文化センター
- 4) 植田拓也/転倒を予防しよう!! - 転倒予防の知識と実践 - / 大田区機能訓練アドバイザー事業 (アルス多摩川 転倒予防教室) / 2016年9月12日 / 大田区アルス多摩川研修室
- 5) 植田拓也/認知症予防のための講座と運動体験 (仮題) / 座間市シルバー人材センター祭り企画 / 2016年10月16日 / 座間市シルバー人材センター
- 6) 植田拓也/サルコペニア・フレイルに対する運動療法/第15回大田区在宅医療連携研究会/2016年10月28日/大田区蒲田医師会
- 7) 植田拓也/高齢者のための運動療法/第4回さがみ糖尿病週間講演会/2016年11月6日/ユニコムプラザさがみはら
- 8) 植田拓也/認知症の予防のための体操/大田区機能訓練アドバイザー事業 (ザ・リバープレイス自治会) / 2017年1月27日 / ザ・リバープレイス下丸子 集会室
- 9) 植田拓也/フレイルとサルコペニア/第3回大田区在宅介護支援専門員研修/2017年2月16日/大田区産業プラザ

1. 研究課題

特別養護老人ホームに勤務する機能訓練指導員の役割

2. 研究活動の概要

一昨年度雑誌掲載された論文を踏まえ、さらに課題を深めるため、要介護度の重度化が進む特別養護老人ホームの入所者に対して機能訓練指導員がどのような取り組みや考えをもっているかを機能訓練指導員にたいして質的調査を行い分析した。現在、分析結果に基づき投稿原稿を作成中である。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

- 1) 東京都社会福祉協議会東京都高齢者福祉施設協議会
職員研修委員会機能訓練指導員研修委員会代表幹事（6年目継続）として研修会企画・運営

1. 研究課題

- (1) 高齢者の居場所（Third Place）の研究
- (2) まちの暮らしの保健室の研究
- (3) 高齢者の健康生活診断指標に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の居場所の研究

高齢者が過ごす自宅以外のもう一つの居場所（Third Place）についての意義やその場所における保健医療福祉専門職が居る意義（役割）について追及している。

①福祉センターを居場所とする高齢者の過ごし方の実態

高齢者が日中過ごす場所や、過ごす場所での居心地、過ごし方と健康との関連について継続して研究している。

②地域で継続して過ごすための場所「まちの暮らしの保健室」における保健医療福祉専門職の存在意義（役割）の検討

地域で継続して安心して過ごすため身近に健康や介護、暮らしの中にある疑問の相談できる場所「暮らしの保健室」の立ち上げに看護職として関与し、平成27年5月オープンされた。その保健室は、看護師の他、理学療法士、社会福祉士、作業療法士、臨床心理士、歯科医など多職種の専門職が関わる。

2016年度は、当保健室において、看護職として相談活動をしながら、地域で過ごす人々にとって継続して過ごし続けるための保健医療福祉専門職の存在意義（役割）についての検討の準備として、文献研究を行い「まちの暮らしの保健室」における研究課題－地域で継続した生活（エイジング・イン・プレイス）実現のために－（2016）について、日本老年社会科学会で発表した。

(3) 高齢者の健康生活指標作成に向けての研究

「高齢者生活診断の指標の作成にむけての研究」について共同研究者として検討した内容である。まず、介護支援専門員を対象とした高齢者への質問表内容についての表面妥当性の検討（2010）を行った。次に高齢者を対象として質問表内容の使用感についてインタビューと分析協力を行った。（2011）更に、「高齢者の健康生活診断の診断指標およびウェルネス型アセスメン

トの枠組みに関する研究：診断表の作成と有用性の検討」（2012）については，学会（示説）で発表した．2016年12月「高齢者のウェルネス型健康生活チェック表の作成」デルファイ法による内容妥当性の検討についての投稿がされた．

3. 研究業績

【著書】

- 1) 瑠璃川正子、澤岡詩野、連建夫、ツバメアーキテクト、河合秀之、関屋利治、上野佳代、島村八重子他；萩窪家族プロジェクト物語；第3章3節「萩窪暮らしの保健室」 p 133-144を執筆 萬書房，2016年5月

【論文】

- 1) 山本由子、小玉敏江、亀井智子、上野佳代；高齢者のウェルネス型健康生活チェック表の作成：デルファイ法による内容妥当性の検討．日本看護科学学会誌vol.36（2016）， p.103-113

【学会発表】

- 1) 上野佳代、菊池和美、長田久雄；「まちの暮らしの保健室」における研究課題－地域で継続した生活（エイジング・イン・プレイス）実現のために－（示説）第58回日本老年社会学会．2016年6月12日
- 2) 菊池和美、宮崎幹和、長田久雄、上野佳代、菊池恵美子；介護予防サロンのサポーター向けブラッシュアップ講座のニーズ：参加者へのアンケート調査結果より（示説），第11回日本応用老年学会．2016年10月29日

【その他の研究活動】

- 1) 第2回全国まちの保健室フォーラム 第2部 全国まちの保健室リレープレゼン「こんなことやってるよ」；地域開放型賃貸住宅で開室するまちの保健室「萩窪暮らし」の保健室の紹介．2017年1月29日

1. 研究課題

住民協働による地域高齢者のスポーツ推進に関する運動生態学的研究

2. 研究活動の概要

東京都あきる野市が住民協働で策定したスポーツ推進計画に参画し、「生涯学習に関する市民アンケート」を活用して地域高齢者のスポーツ実施要因を探索した。第6回国際身体活動公衆衛生学会スポーツプロモーションシンポジウムに採択され、運動不足感が高いスポーツ実施者にはスポーツ資源の提供、運動不足感が低いスポーツ非実施者にはスポーツ体験機会を増加する戦略について報告した。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 江川賢一：2017 ヘルスポモーションのための人材育成：アドボカシー能力をいかに高めるか？日本健康教育学雑誌，25巻1号,39-43頁.

【学会発表】

- 1) Egawa K. 2016 Factors of community sports participation: a cross sectional study of administrative and community-dwellers partnership in a healthy city in Tokyo. The 6th Congress of International Society for Physical Activity and Health. BOOK OF ABSTRACTS, p.260.
- 2) 江川賢一. 2016みんなでつくろう「スポーツ都市あきる野」計画におけるスポーツ実施率の決定因子. 日本公衆衛生学会総会抄録集63（10特別附録），P.244.

【その他の研究活動】

- 1) 東京都あきる野市スポーツ推進審議会での事業推進・評価を実施
- 2) 日本健康教育学会主催「健康課題の解決に向けたアドボカシースキル向上セミナー」講師として参加

1. 研究課題

- (1) 高齢者とメディア
- (2) 高齢者とコミュニケーション

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者とメディア

高齢者がメディアの中でどのように描かれているのかを検証する。また、社会的弱者のイメージがクローズアップされがちな高齢者の“自立した姿”を発信するとともに、高齢者向けの生活上を紹介する。

(2) 高齢者とコミュニケーション

高齢者とコミュニケーションを図る時の音声表現などについて研究し、その成果を発信する。

3. 研究業績

【番組制作および出演】

1) 深夜便（NHKラジオ第一放送）

2016年4月より、レギュラーコーナー「わたし終いの極意」スタート。

人生のゴールを迎えるその日までを健やかに暮らすヒントを、各分野の専門家に聞く。

- ① 「超高齢社会ニッポン」評論家 樋口恵子さん
- ② 「片づけ力は生きる力」生活評論家 阿部絢子さん
- ③ 「お口の健康」鶴見大学歯学部教授 斎藤一郎さん
- ④ 「お迎え現象の不思議」緩和ケア医 奥野滋子さん
- ⑤ 「特集・わたし終いの極意～リスナーか寄せられた終い方」
- ⑥ 「生きがいとは」桜美林大学特任教授・名誉教授 柴田博さん
- ⑦ 「日々、発見！」現役最高齢のピアニスト 室井摩耶子さん
- ⑧ 「悲しみに寄り添うグリーンケア」自治医科大学教授 宮林幸江さん
- ⑨ 「きれいとは、自分でつくる」美容家・佐伯チズさん

⑩「眠る力は生きる力」京都大学大学院教授 重田真義さん

⑪「心を磨き、心を育てる」詩人 新川和江さん

2) 視覚障害ナビラジオ (NHKラジオ第二放送)

①「熊本地震災害関連情報」

②「ナビラジオ交遊録 先輩×後輩」

対談 バイオリニスト・和波たかよし×和太鼓奏者・片岡亮太

③「視覚障害者向け総合イベント・サイトワールド」委員長 荒川明宏さん

④「心にひかり求めつつ生く」歌人 紺野敬さん

⑤「障害とみとめられなくても」片目失明友の会・久山公明さん

【執筆】

1) デーリー東北「私見創見」

月一本の連載の中で、高齢者に関わる問題を提起

2) 東奥日報「伝わっていますか～聞く・話すのコツ」

月一本の連載の中で、世代を超えたコミュニケーションのコツを発信

【セミナー】

1) 「伝わる話し方」子ども宝仙大学

【その他の研究活動】

大学で、スピーチや高齢者とのコミュニケーションに関する講義を実施

麻布大学「コミュニケーション上達法」

桜美林大学「口語表現」

東京経済大学「日本語表現Ⅰ」「日本語表現Ⅱ」

フェリス女学院大学「放送文化と制度」

放送大学「スピーチとコミュニケーション」

1. 研究課題

- (1) 介護老人福祉施設における介護職と看護職の協働に関する研究
- (2) 要介護認定を受けている高齢者の主観的健康とは何かを明らかにする研究
－質的研究－（共同研究）

2. 研究活動の概要

(1) 介護老人福祉施設における介護職と看護職の協働に関する研究

過去5年間の先行研究を検索中である。

(2) 要介護認定を受けている高齢者の主観的健康とは何かを明らかにする研究－質的研究－（共同研究）

要介護認定を受けている高齢者など、疾患・障害があっても自らの健康を良好と評価する者がいる。このような人々の考える健康像とは何なのか？どのような状態を健康と捉えているのか？その本質についてほとんど知られていない。そこで、当事者が現状で考えている健康像を知ることができれば、よりよいサービスの提供に寄与することができるのではないかと考える。そこで本研究は要介護認定を受けている高齢者が何をもって自分の健康度を判断するのか、その基準や健康と思える状態・体験を明らかにする。研究の進捗状況として、現在東京都内の特別養護老人ホームに入所する高齢者9名よりインタビューを終えた状況である。今後、内容を質的記述的に分析していく予定である。

3. 研究業績

特になし

1. 研究課題

アンチエイジング栄養セミナー中止

2. 研究活動の概要

アンチエイジング栄養セミナーの実施（華学園栄養専門学校主催・台東区市民公開講座）

高齢者の多くは、テレビ等のマスメディアの過大なPRにより、断片的な栄養知識をもっているものの、基礎的な栄養教育を受けた経験が少ないことで、疾病予防や健康維持のための基本的な食生活の知識や実践手法を十分にもたない人が多い。本事業は、地域高齢者の自立した食生活を支援するため、栄養知識や料理の工夫などの教育手法を取り入れた健康づくり教室を実施することで、栄養専門学校の利点を活かして地域高齢者の健康づくりに貢献するものである。

9月18日（土）、25日（土）、10月2日（土）の3回にわたり開催する予定で募集し、9名の応募があったが、主催者側の都合で中止となった。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 梶本雅俊、川野因、石原淳子編、久喜美知子他著：コンパクト公衆栄養学 第3版, p 90-105 p 108-111, 株式会社 朝倉書店, 2016年4月5日

【論文】

- 1) 久喜美知子：栄養専門学校管理栄養士科，栄養士科学生のパーソナルコンピューターの利用・情報収集の現状と情報処理演習後の状況，華学園栄養専門学校研究紀要 第5巻第1号，p 9-16, 学校法人 華学園 華学園栄養専門学校, 平成28年12月30日

【学会発表】

- 1) 久喜美知子：栄養専門学校管理栄養士科，栄養士科学生のパーソナルコンピューターの利用・情報収集の現状と情報処理演習後の状況，第63回日本栄養改善学会学術総会，平成28年9月8日，ホテルクラウンパレス青森（青森県）

【その他の研究活動】

- 1) 1) 第7回楽しさアップ！おいしさアップ食育フェア（相模原市主催）
相模原市食育推進計画に基づき実施したイベントに相模原市栄養士会役員として協力
日程：平成28年9月3日（土）
場所：イオン相模原店 パブリックスペース
内容：テーマ「あなたの塩分の感じ方、どれくらい？適塩体験してみましよう」
- 2) 栄養・食生活ネットワーク会議
東京都管内の神津島村の飲食店関係者や給食施設の栄養士の間で情報の共有を図り、野菜摂取増加への取りみを推進するための会議に講師及び座長として出席
日程：平成28年10月24日（月）、25日（火）
場所：島しょ保健所 神津島出張所
内容：テーマ「地域における食生活改善普及事業について」
- 3) 健康フェスタ 2016
相模原市地域保健課が中心となって、心と体の健康づくりに役立つイベントに相模原市栄養士会役員として協力
日程：平成28年10月15日（土）
場所：相模原保健所A館3階一般検診室
内容：テーマ「あなたが感じる塩分濃度の簡易測定、栄養改善の普及活動」
- 4) 2016年度 全国栄養士養成専門学校協議会通常総会及び講演会
日程：平成28年5月26日（木）
場所：明治記念館 2階「紅梅の間」
内容：「学校活動事例発表会 ～地域社会活動の実践例～」
アンチエイジング栄養セミナーと栄養・食生活ネットワーク会議の活動報告
実践事例1 東京エリア 華学園栄養専門学校 久喜美知子
- 5) 第1回 3校合同学術研究集会
二葉栄養専門学校、東京栄養食糧専門学校、華学園栄養専門学校の3校合同による学術研究推進のための発表会
日程：平成28年11月26日（土）
場所：華学園栄養専門学校 10階 階段教室
発表内容：栄養・食生活ネットワーク会議で食育を普及する。
～野菜摂取量増加のためのアドバイス～ 演者：久喜美知子
- 6) 幼児の食育（幼稚園の母親への指導と、全園児の家庭への食育アドバイスのチラシ配布）
日程：平成28年6月16日（木）
場所：学校法人 聖徳学園 鶴川幼稚園
内容：幼児食保護者講習会「子どもの健康と食生活」～好き嫌いをなくすポイント～

1. 研究課題

- (1) 「人間関係力向上プログラム」の介入効果に関する研究
- (2) 虐待防止のための心理学的効果研究
- (3) 高齢者の生涯学習に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 「人間関係力向上プログラム」の介入効果に関する研究

人間関係能力を育成するひとつに、グループ・アプローチがある。その歴史には、Morenoによって創始されたサイコドラマ（心理劇）があり、その種類のひとつに、構成的グループ・エンカウンター（Structured Group Encounter：以下SGE）がある。とくに教育現場で活用されその有効性が実証されている。その学習目標がサイコドラマ（心理劇）から展開されたプレイバック・シアターのウォーミングの手法を用いた「人間関係力向上プログラム群」と基礎的な援助技術の「一般ワークショップ群」にどのように影響するのかを目的とした。その結果、「人間関係力向上プログラム群」に有意な差があった。つまり、人間関係の行動面にもアプローチしているので、SGEの学習目標を目指すワークであることが示唆された。セッションの中では、自分のことを語ることでお互いが開示し合い、他者に受容される体験から、他者に貢献する体験ができたのではないかと考えられる。

(2) 虐待防止のための心理学的効果研究

虐待の定義が挙げられているが、その行為の程度、頻度については言及されていないため、虐待とみなす客観的基準は必ずしも明白でない。また、「虐待認知」とは、ある人がある行為を、虐待とみなすかどうかという認知のことを意味する（中嶋、2005）。よって児童虐待と躰との区別が曖昧でこの程度の違いには個人差があるため虐待を認知することが重要である。そこで本研究では、身近な事例を基にグループディスカッションを通して、虐待認知の前後での比較検討をすることを目的とした。その結果、すべての因子に虐待認知を高めることが示唆された。身近な事例を基にグループディスカッションを行ったことでより深く児童虐待について考える機会だったと推測される。また、事例のシーンを演者がロールプレイでリアルに再現することで、虐待認知が変化したことも推測される。

(3) 高齢者の生涯学習に関する研究

「仲間づくりは健康づくり」のコンセプトから、高齢者の生涯学習を通して、ストレスや生きがい、その関連性などのデータを収集中である。また、介護予防を高める高齢者の運動についても検討している。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 久米喜代美・宮村りさ子・塩澤史枝・森和代・石川利江 保育士養成校での虐待認知－身近な事例を用いたグループワークでの検討－ 2016.11.19 日本健康心理学会第29回大会発表論文集、日本健康心理学会 岡山大学
- 2) 久米喜代美・相談援助における「人間関係力向上プログラム」の効果 構成的グループエンカウンター学習目標から－ 2016.12.10 日本学校メンタルヘルス学会第19回大会発表論文集、日本学校メンタルヘルス学会、一橋大学

【その他の研究活動】

- 1) 人間関係力向上プログラムの実施と評価に関する研究
- 2) 自由時間研究会にて高齢者の生涯学習に関する研究
- 3) 千葉県生涯大学「笑ヨガ」の講義と実践
- 4) 相模原市高齢者福祉課「あじさい大学」健康講座講義と実践（連続講座）
卒業生の自主グループ「ボディワークヨーガ」を実践（連続講座）
- 5) メンタルケア学会「ボディ&メンタルヘルス研修講座」講義と演習
- 6) 特定非営利活動法人 ナチュラル・トリートメント 職員研修
「ボディ&メンタルヘルス・虐待防止・人権擁護」講義と演習（連続講座）
- 7) 桜美林大学大学院健康心理学フェア「ボディワーク」の講義と実践
- 8) プレイバック・シアター日本大会 「構成的グループワークアプローチ－教育領域でのプレイバック・シアターの実践報告－」を発表

1. 研究課題

地域在住高齢者におけるレジリエンスの構成概念に関する研究

- (1) 日本の文献におけるレジリエンス研究の動向の検討と高齢期の健康関連レジリエンスの構成概念の類型化
- (2) 内外の文献における高齢期の健康関連レジリエンスの構成概念の特徴を「成人」「大学生」「患者」「運動・リハビリ実施者」との比較において検討
- (3) 地域在住高齢者の健康関連レジリエンスの構成概念の検討
- (4) レジリエンス尺度の開発

2. 研究活動の概要

地域在住高齢者におけるレジリエンスの構成概念に関する研究

(1) 日本のレジリエンス研究の動向の把握と高齢期のレジリエンスの構成概念の検討：日本において発行されたジャーナルのシステマティックレビューにより、レジリエンス尺度が開発された44の論文を選択した。まず日本のレジリエンス尺度開発の動向をまとめた。健康に関連し、高齢者のみを対象とした尺度は存在しなかった。したがって高齢期の健康関連のレジリエンスの構成概念となりうる構成概念を含む21の尺度を選択した。121の下位概念を次の5つの構成概念に類型化した。【活発化：活力，持続力，新奇性への興味，コントロール，有能感】【自然体：自然な行動，楽観性】【関係性志向：他者との関係の基盤，他者との関係，物理的環境との関係】【マネジメントスキル：一般的対応，具体的対応】【人生の目的：受容・理解，再構築，将来展望】だった。回復・維持を促す構成概念と，成長や最適化を促す構成概念が存在した。

(2) 内外のレジリエンス研究における高齢期の健康関連レジリエンスの構成概念：高齢期に疾病など健康関連の逆境/ストレッサーに直面した際の生活機能の回復・維持を促進するレジリエンスの構成概念について，システマティックレビューにより類型化を行なった。類型化は「成人」「大学生」「患者」「運動・リハビリ実施者」との比較において行った。レビューの基準は，(A) 個人への着目，(B) 心理特性が主，(C) 一般的な逆境/ストレッサー，疾病や健康，運動やリハビリ，(D) 調査参加者は大学生，成人，高齢者，(E) 統計解析による尺度開発，(F) 日本と国際的データベースにおいてコンピュータ検索とハンドサーチを通して2016年7月～9月にアクセス可能な文献とした。746の文献から32文献を選択，175の下位概念を得た。構成概念は3つのカテゴリーに類型化され，サブカテゴリーにおいて，「成人」「大学生」「患者」「運動・リハビリ実施者」との共通点・相違点が見られた。高齢期のカテゴリーとサブカテゴ

リーは【行動の活発化：活発な行動，新奇性への興味，自然な行動，コントロール，具体的コーピング】【自分についての理解・改善：受容・理解，再構築，人生の目的，能力感】【環境との関係：関係の基盤，他者との関係，物理的環境との関係】であった（カテゴリーには下線を付した）．高齢期のレジリエンスには，現在の健康状態の考慮，人生の目的の再構築，成熟が反映されていた．

（3）地域在住高齢者の健康関連のレジリエンスの構成概念の検討：地域高齢者のレジリエンスの構成概念についての調査結果を再検討し論文にまとめた．レジリエンスについては，疾病などの健康関連の逆境に直面した際の生活機能の回復と維持を促進する心理的特性と定義した．研究協力者（N=20，平均年齢81.45歳，72～92歳）に，健康関連の逆境に直面し生活機能の回復と維持を促進する際の考え，努力，工夫等について，半構成インタビューを行ったものである．逐語録のテーマ分析により，【活発化：新奇性受容，やり通す意志，自然体，直感の重視】【人生の目的：人生の目標，意味づけ，肯定的受容，過去の克服の成功感】【関係志向：サポート希求，貢献の欲求，ふれあいの享受】【健康意識：生活のための健康，情報への敏感さ，勤勉さ，評価】の4つの構成概念を抽出した．

（4）レジリエンス尺度の開発：地域在住高齢者の健康関連のストレッサー/逆境に対するレジリエンスの構成概念に関して，以上のシステムティックレビューと質的研究による分析結果を参考に，レジリエンス尺度の構成概念を検討中．構成概念は【活発化】【自然体】【関係志向】【マネジメントスキル】【人生の目的】に集約しつつあり，項目候補は作成中．現在量的調査の準備をしている．

3. 研究業績

【論文】

- 1) 小林由美子，杉澤秀博，刈谷亮太，長田久雄，殿原慶三：レジリエンスの構成概念；高齢者を対象とした構成概念構築のためのシステムティックレビュー．（投稿中）．
- 2) 小林由美子，杉澤秀博，刈谷亮太，長田久雄：高齢期の健康関連の逆境/ストレッサーに対するレジリエンスの構成概念に関するシステムティックレビュー．（投稿中）．
- 3) 小林由美子，杉澤秀博，刈谷亮太，長田久雄：地域在住高齢者における健康関連の逆境に対するレジリエンスの構成概念．（投稿中）．

【学会発表】

- 1) 小林由美子，杉澤秀博，刈谷亮太，長田久雄：地域在住高齢者の健康関連の逆境に対するレジリエンスの構成概念．第58回日本老年社会科学会ポスター発表（2016）．

1. 研究課題

- (1) 世代間の合意形成に関する研究
- (2) 介護者支援に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 世代間の合意形成に関する研究

本研究は、関東近郊30自治体の25歳以上の男女4,676人を対象として、加盟動機（自発/義務）と活動指向性（自己/公共）の2軸で分類した4群の組織参加類型が政治的有効性感覚（PE）に及ぼす影響を、若年（25-40歳）、壮年（41-64歳）、老年（65歳以上）の世代毎に検討した。その結果、PEは壮年及び老年世代で高く、若年世代で低かった。組織参加は、若年世代が少なく世代差が確認された。組織参加類型のPEへの影響については、老年世代では趣味活動のような「自発/自己」型組織が、壮年世代ではNPO活動等の「自発/公共」型組織がPEを高めていた。一方、若年世代では、組織参加とPEの関連は見られなかった。以上の結果から、PEの水準が低く、組織参加が少ない若年世代の参加機会の確保という課題が明らかになった。その上で、老年世代でPEとの関連が強かった「自発/自己」型組織参加が、若年世代を他の世代と結びつける「結節点」として機能する可能性が示唆された。

(2) 介護者支援に関する研究

①独身介護者の語り場の運営

独身の介護者は、介護資源の授受及び就労等の機会から排除される傾向がみられる。孤立しがちな独身介護者への支援方法として、介護者集いの場を設け、ピアサポートを主体とする支援の在り方を検討した。初年度（2016年2月から2017年3月）は、計14回開催した。会での議論を重ねる毎に、参加者の発話が積み重なり、物語が上書きされていく過程で、介護規範に関わるドミナントストーリーが書き換えられるというナラティブ過程が観察された。（特定非営利法人アラジン）

②終末期ケアを行う施設介護者の負担感と宗教的支援の可能性に関する研究

終末期の入所者を担当する施設職員は、担当クライアントの死に直面することで様々な心的ストレスや葛藤があると考えられる。本研究は、終末期ケアを担当した施設職員の燃え尽きや終末期ケアにおける負担感、宗教的支援の必要性等を量的・質的調査から明らかにすることを目的としている。本年度は、調査実施に向けた調査票の作成および調査対象施設への依頼を行った。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 新名正弥, 杉澤秀博, 杉原陽子, 原田謙, 柳沢志津子: 政治的有効性感覚と組織参加の世代差. 老年学雑誌, 7, 31-44 (2017)
- 2) Sugisawa H, Harada K, Sugihara Y, Yanagisawa S, Shimmei M. Socioeconomic status and self-rated health of Japanese people, based on age, cohort, and period. Popul Health Metr. 2016 Aug 2; 14 (1) : 27. PubMed PMID : 27905965.

【学会発表】

- 1) Harada K, Sugisawa H, Shimmei M, Sugihara Y, and Yanagisawa S : Effects of Social Support and Negative Interactions on Mental Health in Japan, GSA Annual Scientific Meeting, Nov. 2016.
- 2) 杉澤秀博, 原田謙, 杉原陽子, 柳沢志津子, 新名正弥: 高齢者の日常生活動作の経済階層による格差-年齢, 時代, 生年コホートによる違いはあるか-, 日本老年社会科学会第58回大会, 2016年6月.

1. 研究課題

介護予防・地域支えあい事業アクティビティ・ケアプログラムに関する研究

2. 研究活動の概要

- (1) 昨年度のフィールドワークを継続して実施中。神奈川県A市にあるBグループホームにてアクティビティ・プログラムの企画と実施に携わる。
- (2) 東京都B市にある総合福祉センターを活動場所として展開されている高齢者の自主運営による英会話グループの講師としてプログラムに参加し、高齢者による自主運営プログラムの実施状況を観察しその展望を探る。

1. 研究課題

- (1) 女性定年退職者の生活と考え方
- (2) 地方自治体の高齢者に対する具体的施策

2. 研究活動の概要

(1) 女性定年退職者の生活と考え方

情報収集

①関連団体所属

日本応用老年学会、老年社会科学会、高齢社会をよくする女性の会、Ryoma 21

(2) 地方自治体の高齢者に対する具体的施策調査 補助業務

三鷹市高齢者実態調査

対象者からの問い合わせ対応、調査票点検（公立大学法人 首都大学東京による調査）

3. 研究業績

特になし

1. 研究課題

認知症に苦しむ人の増加をいかにして地域における活動で抑え込むか、ということを経験的な研究課題とし、この課題を達成するための理論を地域の中での実践から創造していく。

実践の課題としては

- ①地域における認知症予防の講演活動
- ②地域における認知症予防のための碁、将棋、マージャンなどのグループ活動の育成と促進
- ③地域におけるウォーキング・グループの育成
- ④老人施設における傾聴・回想法の活動

である。

これらの実践活動を通じて、

- ①認知症の知識を地域に普及させる活動の効果の研究
 - ②認知症予防のためのグループによるゲーム活動の効果の研究
 - ③認知症の人に回想法や傾聴などの非薬物療法を提供する効果についての研究
- などの研究を行った。

2. 研究活動の概要

地域で活動する町内会や各種団体の協力を得て実践活動ができ、かつデータを集めることができた

①と③について、報告します。

①認知症の知識を地域に普及させる活動の効果の研究

今年度は町内会からの依頼、各種活動団体からの依頼、で合計10回の「認知症は予防できる」と題する講演を行った。その出席者の合計は257名であった。

講演の際にはアンケート調査を行った。その結果から講演活動の限界を明らかにした。それは講演の参加者の偏りである。

どのような人々がこのような講演会に出席しているかということ、年齢では90パーセントが65歳以上の高齢者である。しかし出席した高齢者は、その地域に居住している高齢者の約7パーセント程度だと推定される。

これらの出席者は多くが普段から積極的に活動している人たちである。地域で行われている体操などの運動のグループ、コーラスや編み物などの趣味のグループなど、に参加している人は74パーセント、また複数の活動に参加している人は34パーセントである。

このような数字から一つの仮説を作ることができる。それは、私が行う認知症予防についての講演に聞きに来る人は、認知症になるリスクの比較的低い人々であるという仮説である。私はこれを「上澄み仮説」と称している。

つまり、地域に居住している人々の中で、最も認知症になるリスクの大きい人々は、底深くに沈積していて、私が行う講演には参加していないのである。聞きに来る大多数は、地域の様々な活動に参加し、積極的な生活をしている人々で、認知症のリスクの小さい、いわゆる「上澄み」である。

このようなことが講演の際に依頼しているアンケートのデータから明らかとなっている。

ここから今後の課題が明らかとなる。それは沈積していて、講演に参加しない人々にどのように認知症の知識を伝えるか、ということである。

ごく少数ではあるが、認知症になるリスクの高い人々も参加している。集団で長谷川式認知機能テストを行い、それを自分で採点するという方法を開発し、講演でこれを実施して、無記名で点数のみを提出してもらっているが、それを見ると、257名の内5名が20点以下である。これらの人々は、自分の認知機能の低下に気づいていて、心配から講演に参加したものと考えられる。

④ 認知症の人に回想法や傾聴などの非薬物療法を提供する効果についての研究

これはある有料老人ホームの協力を得て行った。回想法を実践するグループ8名でこの有料老人ホームの利用者8名に、個人回想法1クール（8回）を行い、その効果を測定するために、実施の前後で自己肯定感テストを行った。その結果は実施全のテストの平均点数が6.8点であったのに対して、実施後は8.3点と、1.5点上がった。ただここで問題だったのは、一人の方の点数だけが2.6点下がっていたことである。

個人回想法で自己肯定感が高まることは、それまでの多くの経験から確認してきたが、2.6点の低下は予想していなかったことである。それでこの方（以下A氏）について初回から最終回までの回想の内容を調べた。その結果次のようなことが明らかとなった。

A氏は8回の前半では専ら旧制中学までの少年期と、中学卒業後職に就き、会社を興して本社ビルを建てるまでの回想をしていた。人に接するのが嫌で極めて消極的だった小学生時代に反して、中学生時代は他人をリードしていける力を身に付け、また務めた電線販売会社では、知恵を絞って得意先から厚い信頼を得た。このような成功の回想が前半行われた。

しかし回想が進み、結婚の時期に入ると、自分の成功は奥さんの犠牲の上に成り立ったものであることに気づいた。そして認知症を患い2年前に亡くなった奥さんの追憶が回想の多くを占めるようになり、8回目の回想は、涙ながらに奥さんの亡くなった様子を語られて、終わった。

残念ながら、ライフレビューが完結することなく、8回の回想法が終わってしまった。これが自己肯定感が低下した理由であることが分かった。

3. 研究業績

【講演】

- 1) 2016年4月から6月、横浜市港南区上大岡第4町内会集会所において「認知症は予防できる」とする講演を3回実施。参加者58名
- 2) 2016年9月、横浜市港南区港南中央地域ケアプラザにおいて「認知症は予防できる」と題する講演を2回行った。参加者55名
- 3) 2016年9月 横浜市港南区日野南地域ケアプラザにおいて「サクセスフルエイジングとは何か」と題する講演を行った。参加者30名

1. 研究課題

- (1) 長寿企業の後継者から見た事業承継のプロセス－高齢経営者からの事業承継の質的分析－
- (2) 生きがいをデザインするライフプランニング
－加齢することで生きがいが継続増進する生き方の研究－

2. 研究活動の概要

(1) 長寿企業の後継者から見た事業承継のプロセス－高齢経営者からの事業承継の質的分析－

- ・先行研究の文献購読
- ・地方紙（奈良新聞）へのコラム（月一度）掲載 2016年4月～7月
中小企業の事業承継～長寿企業になるための智恵～

(2) 生きがいをデザインするライフプランニング

－加齢することで生きがいが継続増進する生き方の研究－

- ・先行研究の文献購読
- ・月一回の研究会

場所 ソニー生命保険株式会社

内容 『老年学要論』、『東大がつくった高齢社会の教科書』をベースに老年学を学ぶ。
『回想法ハンドブック』、『ライフレビュー入門』等の知見を活用して、生きがいを
テーマにした新しいライフプランニングの実務に活かすための研修を行っている。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

1) 講演会

日時 平成29年1月11日

主催 滋賀県職員退職者会

演題 「ジェロントロジー（老年学）を学ぶ 超高齢社会を愉快地に生きるための智恵」

会場 サントピア水口 2階講習室

時間 13：30～14：30 講演会 14：30～15：00 講師を交えての意見交換会

参加数 35名

1. 研究課題

- (1) 高齢者のQOLと社会貢献の向上に資する研究
- (2) 大衆長寿社会に求められる公共政策研究
- (3) 大衆長寿社会における老年学の普及、啓発に資する研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者のQOLと社会貢献向上に関する研究

産学公民連携によるフィジビリティ・スタディの推進

(2) 大衆長寿社会に求められる公共政策研究

「市民活動公益団体（NPO，自治会など）」と、地方自治体との新・連携の推進

(3) 大衆長寿社会における老年学の普及、啓発に資する研究

キャンパス・コミュニティ/日本型CCRC構想研究（札幌学院大学大学院）

高・大連携による「エイジング論」の共通科目化研究（札幌学院大学）

3. 研究業績

【公共政策プロジェクト】

- 1) 認知症カフェ運営/プログラム・オフィサー（館山市）
- 2) 新たな介護文化創造PT/プログラム・オフィサー（川崎市）
- 3) 家族看護・介護支援人材養成/プログラム・オフィサー（QOLアカデミー協会）

【主な講演、講義】

- 1) 老年学特論（札幌学院大学大学院地域社会マネジメント研究科/集中講義）
- 2) 介護バル連続セミナー/公共哲学としての死生観（QOLアカデミー協会）
- 3) 健康長寿アンバサダー養成講座（川崎市、横浜市）

ほか、多数

1. 研究課題

後期高齢者における椅子立ち上がりテストと生活動作との関係

2. 研究活動の概要

修士論文では、後期高齢者の10秒椅子立ち上がりテストと大腿四頭筋筋力との関係について、椅子立ち上がりテストの計測値と筋力との関連を検討してきたが、生活動作との結びつきについて検討していく必要性を感じており、椅子からの立ち上がりテストを用い、後期高齢者を対象とした調査を継続して行く。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

- 1) 千葉県理学療法士会学術局主催研修会運営
- 2) 千葉県理学療法士会地域包括ケアシステム推進リーダー研修会運営協力
- 3) 千葉県介護予防事業担当者とリハビリテーション専門職の意見交換会への参加
- 4) 印旛地域リハビリテーション広域支援センター事業への協力
- 5) 「理学療法 臨床実習サポートブック」書評
- 6) 老人保健施設 おおくすの郷 要介護者への理学療法

1. 研究課題

- (1) 定年退職を経験した女性の社会参加
- (2) 高齢期における社会参加

2. 研究活動の概要

(1) 参加

- 『三鷹市～地域づくりのための健康と生活に関する調査』集計作業（於三鷹市役所）
- 『全国透析患者の医療・福祉ニーズに関する調査』集計作業（於全腎協）
- 『シンポジウム』 1月22日
- 『持続可能な社会へ向けた高齢者就業の展望』（於東京都健康長寿医療センター研究所）

(2) 情報収集

- 敬老館のプログラムは社会参加希望者の嗜好にマッチしているか。
- 居住区「ゆうゆう館」のプログラム取得

3. 研究業績

特記事項なし

1. 研究課題

- (1) シニアマーケット関連の調査、設計、実施、報告
- (2) 高齢者の安全・安心に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) シニアマーケット関連の調査、設計、実施、報告

- ・高齢者をメインターゲットとする商品・サービスに関する市場調査、及び企画一式（調査設計・実査・分析・報告等）
- ・高齢者の行動調査の設計、実施、分析、等
- ・某リサーチ会社による、シニアマーケットに関する研究プロジェクトに参画。過去数十年に渡るデータを基に、高齢者の消費行動を分析・考察

(2) 高齢者の安全・安心に関する研究 警察政策学会の「超超高齢社会化研究会」に参画

- ・隔月で行われる研究会に参加
- ・日本市民安全学会毎月行われる研究会に参加
- ・市町村・企業・学会等、依頼講演による啓蒙活動等

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 對馬友美子, 亀田憲, 堀内裕子
「シニア層におけるデジタル・コミュニケーションツールの変化についての考察」
第11日本応用老年学会, 大阪, 2016年10月29日
- 2) 工藤亜希子, 中村耕治, 堀内裕子
「高齢者の安全支援機能に対する意識調査」第11回日本応用老年学会, 大阪, 2015年10月29日

【その他の研究活動】

- 1) 練馬区健康医療福祉都市構想委員会 外部有識者として参画

2) 講演他

- ①2016年4月20日：終活コミュニティ マザーリーフ「老年学入門」
- ②2016年5月25日：終活コミュニティ マザーリーフ「正常老化について」
- ③2016年6月15日：日本経済新聞社 新シニアライフデザイン研究会
「在宅医療最前線-24時間365日のケアビジネス」モデレーター
- ④2016年6月16日：終活コミュニティ マザーリーフ「高齢者のからだ・病気」
- ⑤2016年6月29日：日本市民安全学会「高齢者問題：パネルディスカッション」
- ⑥2016年6月22日：関東女性ファイナンシャルプランナーの会
「老年学を知ってライフプランを考える」
- ⑦2016年7月14日：終活コミュニティ マザーリーフ「認知症を理解しよう」
- ⑧2016年8月3日：「RE-CARE JAPAN」in ビックサイト
「シニア世代の購買行動と販売戦略～老年学の視点から」&シンポジウム
- ⑨2016年9月30日：足立区役所 住区センター職員研修
「いつまでも健康に過ごすために必要なこと」
- ⑩2016年10月6日：某生命保険会社「シニアマーケット市場について」
- ⑪2016年11月4日：サムスン生命 in KOREA「日本におけるシニアマーケットの現状」
- ⑫2016年11月6日：SENDEX 2016 IN KOREA「日本におけるシニアマーケットの現状」
- ⑬2016年11月21日：日本経済新聞社 新シニアライフデザイン研究会
「人を繋げるコミュニティデザイン」
- ⑭2016年11月30日：一般社団法人マーケティング共創協会
「シニアの意識変化と注目市場2016～」
- ⑮2016年12月15日：某自動車メーカー「高齢社会・高齢者を知る」
- ⑯2016年12月20日：富士河口湖町役場「シニアの特徴と運転」
- ⑰2017年1月15日：バイエリア連携協議会&日本市民安全学会合同研修会
「東京都福祉サービス第三者評価を通して・・・」
- ⑱2017年1月16日：某食品メーカー
「シニアやシニアマーケットの捉え方-老年学を軸として-」
- ⑲2017年1月17日：浦安市役所「高齢期の住まい方・暮らし方」
- ⑳2017年1月19日：熊本県 介護複合施設あやの里「介護従事者のためのデスクフェ」
- ㉑2017年1月20日：熊本県 介護複合施設あやの里「医療従事者のためのデスクフェ」
- ㉒2017年1月24日：横浜市社会福祉協議会No1
「老年学（ジェロントロジー）からみたシニア市場の捉え方」
- ㉓2017年1月26日：横浜市社会福祉協議会No2
「老年学（ジェロントロジー）からみたシニア市場の捉え方」
- ㉔2017年1月26日：練馬区健康医療福祉都市構想委員会
「地域包括ケア時代の街づくりに何が必要か～シニアの視点から～」

- ②⑤2017年2月6日：神奈川県安全防災局安全防災部
 犯罪の無い安全・安心まちづくり交流会 基調講演
 「老年学から考える『振り込め詐欺防止』」
- ②⑥2017年2月16日：株式会社ビデオリサーチ コミュニケーションセミナー
 「彼らが動けば、市場が動く！事例からひもとくアプローチのヒント」
- ②⑦2017年2月23日：東芝ITユーザー会 自分育成セミナー
 「正常老化と知って、自分を知ろう～老年学（ジェロントロジー）的視点から～」
- ②⑧2017年3月8日：IAアネックス研究会
 「シニアの意識変化とシニアマーケティング改革の方向」

2) 執筆

- ①對馬友美子・堀内裕子・他共著：新シニア市場攻略のカギはモラトリアムおじさんだ！
 ；2017年2月；ダイヤモンド社
- ②堀内裕子. 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました
 TECHNOプラス 福祉介護 日本工業出版社
 No.76 4月 「車いす収納装置付き自動車」
 No.77 5月 「介護とシニアマーケット」
 No.78 6月 「終活と老年学Ⅰ」
 No.79 7月 「終活と老年学Ⅱ」－なぜ「終活」が今必要なのか－
 No.80 8月 「終活と老年学Ⅲ」－なぜ「終活」が今必要なのか－
 No.81 9月 「終活と老年学Ⅳ」－エンディングノート－「私の取扱説明書」
 No.82 10月 「終活と老年学Ⅴ」遺影撮影会
 No.83 11月 「終活と老年学Ⅵ」デジタル遺品1
 No.84 12月 「終活と老年学Ⅶ」デジタル遺品2
 No.85 1月 「日本より早く高齢化が進む韓国情報」
 No.86 2月 「介護・福祉関連展示会情報 in 韓国」その1
 No.87 3月 「介護・福祉関連展示会情報 in 韓国」その2
- ③日本の防犯・防災 2016年9月号vol.32 「超高齢社会の最前線」
- ④日経電子版：NIKKEI STYLE
 2017年3月8日：2020年が問いかけるユニバーサルデザイン社会の課題
 2017年3月1日：「老い」を学べば、企業は成長できる 老年学に技あり
 2017年2月22日：「元気な今のうちに」消費 「逆算」がシニアを動かす
 2017年2月15日：シニア消費のカギを握る「モラトリアムおじさん」とは？
 2017年2月8日：五輪ボランティアで心身健康に社会とつながるシニア
 2017年2月1日：東京五輪後を動かすシニア層 前回大会の郷愁が動機？

1. 研究課題

- (1) 看護（職）と介護（職）の連携の促進
- (2) 看護実践における経験知の集積と分析

2. 研究活動の概要

(1) 看護（職）と介護（職）の連携の促進

11年間にわたり看護（職）と介護（職）の連携促進について研究を継続してきたが、そこから①看護職が医学的知識を高め、優れたケア技術に習熟すること。②看護職が介護職と清拭や食事介助などの日常生活行動ケアを協働すること。③看護・介護職双方が遠慮なく意見を出し合える「環境作り」の重要性の3つが抽出できた。今年は、上記の③を探求したいと考え、特養の会議に出席・録音し、まとめている。

(2) 看護実践事例における経験知の集積と分析

看護実践事例集積研究会（代表：川島みどり日赤看護大学名誉教授）に所属している。専門雑誌（15誌）、学会報告集など事例報告に含まれる「経験知」（臨床場面で培われた勘や感覚などとして体得された技術・意識を言語化したもの）を精練・集積して、「多くの臨床現場に活用できる看護技術」に技術化し、そして事例ごとに命名して分類する作業していくことを目的に2002年5月から継続している。

個票作成を分担し、毎月の研究会でグループに分かれ、2次チェックを行い、さらに3次チェックを経て、看護実践事例をウェブ上に公開している。2007年4月1日に、ホームページを立ち上げ、また10年以上の個票として1010事例を集積、ウェブ上で報告し、看護実践を現場で展開できるようにし、現場の看護師と意見交換をしている。今年は1010事例をどの視点で分析していくかの討論を行ったが、「食に関する実践に焦点を当てまとめている。「看護の状況」から「患者の状況」「介入の根拠」「介入」「結果」を整理、看護師が何に着目し、実践しているかの視点から、分析の方向性の検討を続けた。今、原点に帰り、「何を明らかにしたいのか」を話し合い、また失敗事例にも焦点を当て、検討を続けて行くことを確認しあった。

3. 研究業績

【研究費などの助成金】

- 1) 平成28年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）

【その他の研究活動・社会活動】

- 1) 看護実践事例集積研究会
- 2) いなぎ苑（稲城市の介護老人福祉施設）において理事
- 3) 介護認定審査会委員（東京都稲城市・世田谷区）
- 4) 週1回、特養で「耳掃除・耳清拭」「口腔ケア」のボランティア活動

1. 研究課題

- (1) 中年期の人が望む老後像に関する研究
- (2) 高齢者就労支援に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 中年期の人の老後像に関する研究

2014年以前に行った、中年期の人を対象としたインタビュー調査、質問紙調査の分析を分析し直し、インタビュー調査の内容については、日本老年社会科学会に於いて一般発表を行った。9月には、両調査をまとめ、博士論文として提出した。博士論文の内容についても投稿すべく、執筆・推敲を逐次行っている。

(2) 高齢者の就労支援に関する研究

2014年に、都下2か所の中高齢者就労支援施設でモニターを募り、合意の得られた30名にインタビュー調査、235名に質問紙調査を行った。昨年度インタビュー調査の内容を質的に分析し、日本応用老年学会で発表した。本年度は、質的に分析した内容を基に、質問紙調査の結果を分析し、高齢者の求職理由による類型化とその特徴を見出した。それらについては、日本公衆衛生学会で発表し、日本応用老年学会での発表内容と日本公衆衛生学会の発表内容を著書及びシンポジウムで発表した。著書は、一般の方向けの表現としたため、著書の内容を投稿論文としてもまとめている段階である。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 藤原佳典・小池高史（編著者）：ジェロントロジーライブラリー②高齢者の就業と健康：何歳まで働くべきか？社会保険出版、2016。（松永担当 pp88-102）

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 松永博子・直井道子：中年期の人の望ましい老後像と関連要因の解明. 日本老年社会科学大会, 第58回, 松山, 2016年6月
- 2) 松永博子, 南潮, 鈴木宏幸ほか：中高年齢者向け就労支援施設に来所する人の類型. 日本公衆衛生学会総会, 第75回, 大阪, 2016年10月

【その他の研究活動】

- 1) 松永博子：高齢者就労のマッチングに向けた試み. シンポジウム持続可能な社会に向けた高齢者就業の展望, 2017年1月22日

1. 研究課題

在宅中高年介護者の体力や身体機能が介護負担感に与える影響

2. 研究活動の概要

在宅での主たる介護者で40歳以上の中老年者の体力の1指標である体重支持指数と介護負担感、また被介護者の自立度などに関連があるか調査し、その結果、介護の中でも食事や清潔、トイレ動作などの介護の項目に関する介護負担感が、体重支持指数が低いほど増加する傾向が見られた。

今後も引き続き、研究の継続をしていく予定である。

3. 研究業績

【その他研究活動】

- 1) 平成28年度千葉県理学療法士会学術雑誌「理学療法の科学と研究」編集委員
- 2) 千葉県富里市介護保険認定審査会委員
- 3) 救護施設・盲養護老人ホーム「猿田の丘なでしこ」機能訓練相談員
- 4) 平成28年度千葉県理学療法士学会 超高齢時代の理学療法 一般演題座長予定
- 5) 平成28年度富里市障がい者家族会さつき会と専門学校生との交流授業の実施
- 6) グループホームすずらん 転倒予防体操の実践
- 7) 千葉県理学療法士会新人教育プログラム「高齢者の理学療法」講師

1. 研究課題

地域包括支援センターにおける総合相談支援業務を担当する社会福祉士の役割

2. 研究活動の概要

「地域包括支援センターの総合相談の実践プロセス－経験5年以上の社会福祉士へのインタビュー調査から－」と題した研究論文を執筆し「老年学雑誌」へ投稿した。

3. 研究業績

吉田綾子, 杉澤秀博 (2017) : 地域包括支援センターの総合相談の実践プロセス－経験5年以上の社会福祉士へのインタビュー調査から－. 老年学雑誌, 掲載確定.

平成28年度研究活動報告

発行：桜美林大学 老年学総合研究所
〒194-0294
東京都町田市常盤町3758
TEL. 042-797-2661(代)

発行日：平成29年3月31日

印刷：(有)片野印刷